

平成16年度

奈良県公立学校優秀教職員  
表彰事例集

平成17年3月

奈良県教育委員会

## は じ め に

今日、社会情勢の急激な変化の中であって、次代を担う子どもたちが豊かな心をはぐくみ、たくましい人間として成長していくために、教職員の果たすべき役割が、あらためて注目されています。「教育は人なり」と言われるように、学校教育の成否は教職員の双肩にかかっています。まさに、学校が多様な課題を抱えた今日ほど、教職員の資質・能力の向上と力量の発揮が求められている時代はないと言えるでしょう。

国における教育改革でも、教職員の資質向上は最も重要な課題の一つと捉えて、関連する様々な施策が打ち出されています。なかでも、地道な教育実践をし、優れた成果をあげた教職員を表彰することは、その人の日々の努力に報い、教育への意欲を更に高めることから、全国的な広がりを見せています。

奈良県教育委員会でも、このような国の動きとともに、県に設置された「教員の資質向上に関する検討委員会」からの提言を受け、教職員の意欲の高揚と学校の活性化を図ることを目的として、職務に精励し、他の教職員の模範となる教育活動を実践している教職員及び教職員グループを選考し表彰することといたしました。

昨年8月、県内の公立学校長より推薦いただいた表彰候補者の教育実践を、9名の外部委員で構成する「優秀教職員選考委員会」に諮り、厳正に審査していただいた結果、県内の公立学校から35名と3つのグループ、あわせて38件56名を選考し、平成16年度奈良県公立学校優秀教職員として、11月1日の「奈良県教育の日」に表彰いたしました。

この冊子は、これら表彰を受けられた教職員及び教職員グループの表彰事例を県内の教職員の皆さんに広く紹介することで、今後の各学校における教育実践の参考にしていただくように作成いたしました。どうか、この冊子を御活用いただき、奈良県教育の活性化に寄与されることを願っています。

平成17年3月

奈良県教育委員会

教育長 矢和多忠一

# 目 次

## 【小学校】

### 教科教育の部

- 1 学校生活を明るく豊かにするための表現活動  
奈良市立伏見南小学校 田村 麗子 1
  - 2 「話しことばを育てるために - 国語科 - 」の研究に取り組んで  
月ヶ瀬村立月ヶ瀬小学校 井ノ尾由美子 3
  - 3 自分らしさを発揮し、ひとりひとりが夢中になる体育学習  
平群町立平群南小学校 亀井 孝至 5
  - 4 科学的な見方・考え方を高める理科学習  
斑鳩町立斑鳩小学校 梅本 利政 7
  - 5 自分の願いや思いを伝え合うコミュニケーション能力を育てる  
桜井市立纏向小学校 浦前 知佐子 9
  - 6 今、求められている「読むこと」の学習  
榛原町立榛原小学校 佐田 壽子 11
  - 7 科学への関心を高める理科教育の取組  
田原本町立田原本小学校 今西 明 13
  - 8 学習と評価の一体化を目指した教科ポータルフォリオ  
御所市立葛小学校 福本 義久 15
  - 9 確かな学力の育成を目指して  
五條市立阪合部小学校 河口 敬之 17
- ### 生徒指導の部
- 10 朝の校門指導の大切さについて  
斑鳩町立斑鳩西小学校 植田 国男 19
  - 11 自分を大切にし、人も大切に児童の育成  
五條市立北宇智小学校 藤井 利夫 21
- ### 特別活動の部
- 12 陸上競技を通して児童の生き生きした活動を引き出す取組について  
三宅町立三宅小学校 三宅陸上クラブ 23
- ### 総合的な学習の時間の部
- 13 追究する力、かかわる力、表現する力を高める総合的な学習の時間  
桜井市立桜井南小学校 明島 祐見子 25
  - 14 地域にふれ、地域を感じることから心を育む取組について  
上北山村立上北山小学校 杉本 勉 27
- ### 人権教育の部
- 15 「地域に出会い・ふれあい・学びあう」  
桜井市立上之郷小学校 坂本 悦子 29
- ### 情報教育の部
- 16 情報教育の推進と教育の情報化（IT活用を中心として）  
奈良市立三碓小学校 武田 克之 31
- ### 学校運営の部
- 17 効果的な会議の進め方について  
奈良市立朱雀小学校 石川 哲史 33
- ### 読書活動推進の部
- 18 本好きな子どもを育てるために  
葛城市立忍海小学校 中川 和代 35

## 【中学校】

### 学校教育目標の具体化の部

- 19 校務分掌（教務）からの情報発信について  
高取町立高取中学校 富田 英明 37

20	子ども・地域に寄り添った教育の実現を目指して 明日香村立聖徳中学校	植田 栄子	3 9
21	学校教育目標を具現化するための教育活動について 十津川村立上野地中学校	前木 伸一	4 1
	道徳教育の部		
22	生徒の心を育てる道徳教育 室生村立室生中学校	若田 文子	4 3
	障害児教育の部		
23	弱視学級生徒の指導実践について 平群町立平群中学校	木村 学	4 5
24	中学校における障害児学級の経営について 大淀町立大淀中学校	上村 明美	4 7
	健康安全教育の部		
25	子どもたちが、生涯にわたって健康に生きるための支援活動 橿原市立八木中学校	大杉 好	4 9
	部活動の部		
26	中学校における吹奏楽部の指導について 生駒市立生駒中学校	牧野 耕也	5 1
27	女子ソフトボール部・全国優勝にいたるまで 三郷町立三郷中学校	末永 一夫	5 3
28	部活動を通しての生徒の健全育成について 五條市立五條東中学校	片山 哲郎	5 5
<b>【高等学校】</b>			
	学校教育目標の具体化の部		
29	新学習指導要領に基づく教育課程編成の工夫について 奈良県立橿原高等学校	中川 喜次	5 7
	教科教育の部		
30	情報表現能力の育成を目指した商業教育の実践 奈良県立桜井商業高等学校	商 業 科	5 9
31	「教育の情報化」と「基礎・基本の学力の確実な定着」 奈良県立室生高等学校	田淵 泰央	6 1
32	課題研究を通して社会に生かせる「ものづくり」についての実践 奈良県立王寺工業高等学校	久保田憲司	6 3
	生徒指導の部		
33	二輪車の乗車マナー習得のための学校・地域・家庭の在り方について 奈良県立大淀高等学校 交通安全教育研究実践グループ		6 5
	総合的な学習の時間の部		
34	L.S.Q.(ライフ・スタイル・クエスト)の立ち上げと効果的な運営 奈良県立郡山高等学校	西川 裕弘	6 7
	情報教育の部		
35	奈良県情報教育の普及について 奈良県立山辺高等学校	服部 秀一	6 9
	部活動の部		
36	夢に向かって努力する生徒の育成 奈良県立片桐高等学校	安田 弘子	7 1
37	生徒の成長について 奈良県立田原本農業高等学校	加藤 義明	7 3
38	部活動を通じた「生きる力」を育む取組について 奈良県立桜井高等学校	堀内 秀規	7 5

学校生活を明るく豊かにするための表現活動  
図画工作科を通して

奈良市立伏見南小学校 田村 麗子

1 実践内容

(1) はじめに

平成14年の新学習指導要領の施行にともない、今までの学習内容や指導方法の見直しの必要性を感じた。学習のねらいを明確にしなが  
ら、教科時間数の削減も現実の問題としてとらえ、子どもたちの表現  
活動をどうすれば充実したものができるかという課題解決のために、  
次のような点について考慮し、教材研究を進め、指導の工夫をした。



ア 教科としての図画工作科を大切にしながら、図画工作科の教科時間  
だけでなく、子どもたちの生活そのものを表現活動の場とする。

イ 図画工作科で培った力を、一人一人の子どもの個性に合わせた方法で表現活動の中に生か  
せる指導の工夫をする。

表現活動を充実したものにするためには、作品を多くの人と共感することができる場の設  
定が大切である。また、生活に潤いを与え、生活に生かされる作品づくりを目指すことによ  
り、表現活動の感動がさらに深まり、生活が創造性豊かなものになる。実践するにあたりそ  
の手立てとして、図画工作科のカリキュラム作成の時に、あらゆる行事・総合的な学習の時  
間等への参加や関わりを積極的に進めること、また、他の教科との関連を考えたテーマを設  
定し追究するなど、教科の枠を越えた学習方法を試みることも計画した。このような試行錯  
誤の中で行った、高学年での実践のいくつかをまとめてみる。

(2) 実践例から

ア 創立20周年の式典を祝って(5年生2学期)

体育館という広い空間の中に生かすこと  
のできる作品として、共同制作によって、1グ  
ループ縦2m×横5mの大きな画面に自分た  
ちの夢を描かせた。共同制作によって、みん  
なで作る楽しさや、心をひとつにして作り上  
げる喜びを感じさせるねらいが達成できた。



夢を描こう!ぼくたち・私たちの世界

イ 卒業式・入学式を祝って(5年生3学期)「春だよ 花いっぱい」

早春の鉢花を木版画で表させ、版画  
の良さや美しさを感じさせた。等身大  
の鉢花を一人が一つ作ることで、102個  
の花が式場いっばいに飾られた。お祝  
いの式場の環境づくりには効果的であ  
る。3月には卒業式で6年生を送り、  
4月には新1年生を迎える手づくりの  
式場となった。



「春だよ 花いっぱい」の作品で式場を飾る

#### ウ 修学旅行の思い出を飾ろう(6年生1学期)「思い出を飾ろう」

実践例イの「春だよ 花いっぱい」の木版画の学習で制作した版木を再利用して、修学旅行の写真立てを作らせた。版木の彫りの味わいを生かした写真額ができ、修学旅行の思い出を形に残すものとなった。

#### エ 6年間の思い出を絵に表す(6年生1学期)「好きな場所から」

思い出を形に残すために、6年間過ごした学校の様子を好きな場所から絵に描かせた。学校生活でのいろいろなことを思い出しながら描き、今まで気付かなかった発見もあった。また、身近な材料を生かした手づくりの額を作らせ、絵を飾らせた。絵と自分でデザインした額とが一体となった作品に仕上がった。

#### オ 卒業記念に(6年生3学期)「12歳の自画像」

自画像を木版画で表させ、学級全員分の枚数を刷り、交換し合って版画集にまとめさせる。学級の友だちの作品をまとめた思い出の記念作品となった。全員の版画の自画像が卒業式式場に展示され、手づくりの卒業式を演出した。

## 2 成果及び課題

取組の成果として、アの作品制作では、デジタルカメラやパソコンを活用し、自分をリアルに表すことで、見る人にとっても臨場感溢れる作品となった。友だちと力を合わせて大きな作品を作り上げた喜びを共感でき、さらに式典会場に飾ることで、20周年を学校・地域の人々と共に祝うことができる児童主体の会場となった。イの作品は、6年生を送り1年生を迎えるという、在校生代表としての自覚を促すことになった。送る気持ちや迎える気持ちを形に表した手づくりの式場ができあがった。ウでは、一つの表現活動から生まれた材料を次の表現に生かすということから、物を大切にすること意識が育った。写真を入れて飾ることで作品が一層味わいのあるものとなった。エについては、絵を飾ることによって自分たちの生活に潤いをもたらすことに気付き、絵を飾る楽しさと作品を大切にすることにつながった。オは、卒業記念制作の一つである。版画集は学級の思い出を共有できるものとなった。また、自画像を卒業式式場に展示することにより、多くの人に祝ってもらえる自分たちの手づくりの会場となった。

以上のような成果がみられたが、図画工作科教育の現状は、個々の子どもが、自分らしさを求めて模索しているのに、教師が適切な支援ができず、子どもの可能性を引き出せないということもあり、子どもの豊かな生活を深く認識し、子どもの感性を確実に育てていとはいえない状況もある。子どもの可能性を引き出し、高めるためには、まず、教師が子どもたち一人一人をしっかり見つめ、理解しなければならない。日々の取組の中で、図画工作科での子どもたちの作品からは、一人一人の人間としての様々な成長をみてとることができる。子どもたちは常に「表現」している。それを豊かなものにするためには、限られた授業時間数の中であるが、教科として、すべての子どもが大切な存在であることを子どもたちの表現を通して、子どもたちに関わるすべての人に伝えることが重要である。子どものよりよい変容に向けて、子どもそのものを丸ごと抱え、受け止める姿勢を大切にしたい。専門職としてより高い資質・能力を持ち続け、日々研鑽を積むことが、子どもの「表現」を豊かなものにするできると考える。

## 3 その他参考となる事項

奈良市立伏見南小学校 e-mail fusimiminami-e@naracity.ed.jp

「話しことばを育てるために - 国語科 - 」の研究に取り組んで

月ヶ瀬村立月ヶ瀬小学校 井ノ尾 由美子

1 実践内容

月ヶ瀬小学校は、平成6年度より「話しことばを育てるために」という主題で国語科の授業研究に取り組んできた。この間、サブテーマは、「国語科における話し合いを通して」「問い続けることを大切にして」「確かで豊かなパネルディスカッションを志向して」と変わってきた。以下は、その研究を進める中で実践したものである。



(1) 国語科学習指導の活性化を図るための取組

- ア 継続的な児童の実態把握
- イ 6年間を見通した年間指導計画の作成
- ウ 支援と毎時間の展開を明確にした指導案づくり
- エ 授業改善の具体的試み
- オ 授業を振り返る

(2) 伝え合う力を育てるための「書く」、「話す」 - 小学校話しことば教育への試案 - 関西国際大学高梨敬一郎教授との共同研究。「話して書く」「書いて話す」を繰り返す、コミュニケーション能力の向上を図る。

(3) パネルディスカッションを取り入れた授業例（平成13年度 第5学年）

- ア 単元名 計画的に話し合おう - 烏梅を伝える中西喜祥さんを紹介しよう - （全8時間）

イ 単元及びテーマ設定理由

例年、月ヶ瀬小学校の5年生は「総合的な学習の時間～烏梅～」で、烏梅づくりを見学、体験している。「烏梅」は、熟した梅に煤をまぶし、薫製、天日干ししたもので、主にべに花染めの媒染剤として使われる。昔は、この地で大量に生産されて京都の染め物屋に送られていた。月ヶ瀬村が梅で有名になった所以である。今では、文化庁の買い上げや東大寺お水取りに使う造花の樁の染色用、研究用など、特別な需要のみになったが、この媒染剤は近年見直されつつある。全国で唯一人烏梅の製法を伝える中西さんは、親の手伝いをしながら、梅の選別や煤のまぶし方、温度調節、天気の見方などを学んできたという。今、その技術を家族や関係者に伝えようとしておられ、中西さんから学ぶことは多くあった。

ウ テーマに対する取組

「伝え方についてパネルディスカッションし、より工夫する。」というめあてを持って取り組んだ。限られた紙面で文章を書いたり、言葉遣いについて考えたりできる「新聞」を取り上げ、小学生新聞の読者を想定して取りかかった。7月に、取材の計画を立て、写真、ビデオ撮影、テープなどの準備をして、中西さん宅を訪問し、烏梅づくりの体験をさせてもらった。烏梅の製造過程だけを取材するのではなく、中西さんの人物像に迫るように児童に働きかけた。その後、新聞づくりに取りかかった。

エ 本時案の目標

- (ア) 中西さんのどのようなところを伝えたいのか、聞き手に新聞の意図が伝わるように



取材した事実に基づいて話すことができる。

(イ) 話し手の意図と新聞記事の書き方がふさわしいかどうかを考えながら聞く。

(ウ) 書き手の意図が小学生新聞の読者に伝わるように、新聞記事の書き方を話し合う。

- ・テーマを確かめる。
- ・パネリストが、新聞について話す。
- ・パネリストとフロアで質問や感想を交流する。
- ・フロアから意見を出す。
- ・パネリストの感想を聞く。
- ・話し合いを振り返る。



テーマの確認



パネリストの発表

### オ 考察

子どもたちは研究授業を楽しもうと積極的に発言した。中西さんから学ぶ姿勢ができていた。中西さんへの質問、眼差しに尊敬の念が表れていた。「中西さんの人柄が表れているのはどこでしょう。」のような発問で中西さんの生き方に触れる内容で話し合い、中西さんのどこを紹介していくのか踏み込んでいくとよかった。

## (4) 「読むこと」(説明文)の指導と評価の実践

「筆者の考えと事実を読み取ろう」(第6学年)

単元の指導目標 単元の評価規準 指導と評価の計画 授業における評価例 観点別評価の進め方 本単元における観点別評価の総括 1学期末における観点別評価の総括

## 2 成果及び課題

「話しことばを育てるために」を主題として、目標を定め、修正しながら、学校全体で研究に取り組んできた。常に授業の改善や新しいサブテーマについて意識し、研究を通して教育活動を活性化することができた。

## 3 その他参考となる事項

### 参考文献

月ヶ瀬小学校研究紀要(平成6・7・9・13年度)

第47回へき地教育研究振興大会 月ヶ瀬小学校実践資料集

平成9年度教育研究所国語科研修講座発表資料

関西国際大学研究紀要 第3号(平成14年3月)

平成14年度教育課程研究集会実践事例発表資料

奈良県教育委員会文化財保存課編集『烏梅製造』



自分らしさを発揮し、ひとりひとりが夢中になる体育学習

- 心・体・力を「創る」子どもをめざして -

平群町立平群南小学校 亀井 孝至

1 実践内容

子どもたちの体力は二極化が進み、小さい頃から特定のスポーツをして体力が身に付いている場合と、運動や遊びに消極的であるため体力があまり付いていない場合がある。そこで、生涯にわたって体を動かす楽しさや心地よさに気づくきっかけになればと願い、体力づくりの指導に取り組んだ。



自分や集団の力に合った運動の課題発見・課題解決や学校の状況に応じた学習の充実、心と体を一体としてとらえ、体を動かす楽しさや心地よさに気づき、自ら進んで体力を高めることができる態度を身に付けるために、次の「心・体・力」を「創る」子どもの育成を目指した。

友だちの心、自分の心を大切に	人との関わり	「心」
体を動かす楽しさ・心地よさに気づく	気づき・調整	「体」
体力を付け、基礎的な技能を身に付ける	体力・技能	「力」

(1) 教科体育として

体育科の指導計画や授業の流れを考えるとときに「心・体・力」の3つの要因を意識して進めることにした。そうすることで、指導者は自信をもち、子どもたちは生き生きと活動できるのではないかと考えた。

「心」...見合い学習、補助し合う場面の設定、ルールの工夫など。

「体」...学習カードの活用、チャレンジカードの活用、場の工夫など。

「力」...教具の工夫、運動量の確保、練習の場の工夫など。

また、それぞれのクラスが共通で行う「からだタイム」を体育科の各授業の最初に行うことにした。必要に応じて各クラスでその内容は工夫していくが、原則として「みなみな体操」と「ちゃれんじ運動」を行うこととした。

「みなみな体操」は、みんなが知っている曲に合わせ、体と心をほぐす体操である。柔軟性が低いというスポーツテストの結果を受け、体を曲げる運動を意識して盛り込んだ。

「ちゃれんじ運動」は、運動場や体育館の遊具や教具を使い、様々な運動の経験をするとともに、あらゆる力を付けようとする運動である。具体的には、右に示したシートを運動場や体育館に掲示し運動の内容を例示した。



ちゃれんじ運動と掲示シート

(2) 遊び・縦割班活動として

「心」...友だち・異年齢集団との関わり・情操面での成長をうながす

「体」...脳を刺激し、筋力・調整力・反射神経などを養う

「力」...夢中に遊ぶ中で、持久力・集中力を身に付ける

どろんこ広場と道具の整備

感性・意欲の向上

お手玉遊びの検定表・縦割班対抗集会

集中力・人との関わりの育成

一輪車遊びの検定表・手すりの設置

調整力・バランス感覚の育成

### (3) 保健・性に関する学習として

各学年の指導計画を整理するなど、保健の授業と以前から本校で進められてきた性に関する学習を合わせて計画を立て、縦と横の系統性を再確認し授業に取り組んだ。



一輪車・どろんこ広場・お手玉集会

## 2 成果及び課題

単元の指導計画を作成する段階で、子どもたちに学ばせたいこと(学んでほしいこと)は何かを考えて目標を設定した。次に、目標を達成できた子どもたちの姿を想定し、評価規準とした。さらに、指導に生きる評価を進めるために、本時の学習における評価を基にして次時の学習を修正できるような指導計画の作成を心がけた。

体育科においては、従来から授業中の評価活動が一般的に行われてきた。しかし、技能中心の評価が多く、評価の観点(関心・意欲・態度、思考・判断、技能、知識理解)全体にわたる子どもの学習状況の把握については十分でなかったように思われる。そこで、学習を進めながら学習の達成状況を素早く見取ることができるよう評価規準をより具体化するようにした。また、子どもに記入させる学習カードも評価の参考にできるように工夫した。今後は、子どものいきいきとした学習活動を促進するよう、さらに取組を継続していきたい。

見合いや励まし合いの機会を多くもたせることにより、体育科の学習に対してより積極的に取り組もうとする子どもたちの姿が多く見られるようになった。またBGMを効果的に活用することにより、時間の見通しをもって活動に取り組ませることができた。

外遊びをする児童も増え、遊びの幅が広がり、友だち関係も同学年、異学年を問わず広がりをみせた。

保健、性に関する学習では、単なる授業としての学習にとどまらず、子どもに自分を肯定し、様々な人と共に生きるための学習であることを再確認させることができた。

## 3 その他参考となる事項

平群町立平群南小学校ホームページ <http://www1.kcn.ne.jp/~heguri-s/>

1 実践内容 これまでの研修や研究から（子どもたちの科学的な思考を高める）

(1) 理科室経営について

理科室は、とても楽しいところ、子どもたちはワクワクしながら楽しみにやって来る。低学年の子どもたちも「ちょっと、見せて、入らせて。」と休み時間のかわいい訪問者となる。化石や実験器具はとても興味深いものであるようで、「人体模型もちょっと見たい。」ということになる。理科室は、学校の中で一番不思議で楽しい空間なのかもしれない。子どもたちが観察や実験を行いやすいよう器具を整理したり、理科室地図を作製したりすることはもちろんだが、いろいろな写真や実物、作品などを子どもたちがいつでも手にとって触れられるようにしている。



(2) 学習活動について

ア エネルギーとしての興味・関心・態度

科学的な見方・考え方を高めるためにも、子どもたちのやる気と好奇心を高めなければならぬと考える。そこで、1時間にひとつは実験や制作活動を計画し、身近な素材の活用を心掛けている。

例 第6学年「大地のつくり」の学習の中で、画用紙に地層の図を書き、砂や粘土、小石などのサンプルを木工用ボンドで貼り付けフロッピーケースに入れてつくらせた卓上モデルは好評であった。

例 第3学年「太陽のひみつ」では、身近なアルミホイルとボール紙、空き缶でつくった小さなソーラークッカーで太陽のエネルギーの大きさを感じさせた。



イ 理科の伝統を大切にしたい指導

理科室の使い方や基本的な器具の扱いについて 地層モデル、化石、ソーラークッカー「理科室のお作法」と名付け、掲示を行っている。実験の時のきまりや顕微鏡、アルコールランプの使用注意なども明示し指導を行っている。

ウ 校内の自然の活用

「セイヨウカラシナからモンシロチョウへ」

河川敷や空き地に、黄色い菜の花に似たセイヨウカラシナの花が咲くが、葉をうらがえすとモンシロチョウの卵がたくさん産み付けられていたり、また、花壇のパンジーにも最近タテハのなかまでツマグロヒョウモンの卵が多く見られるようになった。9月には、プールの壁でシオカラトンボが脱皮をしている姿が見られた。こういった

校内の自然を子どもたちと楽しんでいる。

## エ 指導と評価の一体化をめざした授業

指導にあたり、素材や学習の流れを何度も練り直し、計画の再考も必要になる。そこで、子どもたちのノートや記録を基に修正し、子どもの思考に沿った授業づくりを行っている。ノート指導では、自分の言葉で「課題」や「観察したこと」を書かせ、板書を写すだけでなく自分の学習履歴としての活用を指導している。評価方法についても、コンセプトマップや凝縮ポートフォリオ、能動的自己評価などを活用している。



チョウの育ちの凝縮ポートフォリオ

## オ 個に応じた指導

個に応じた指導を進めるため、自由志向の実験を行う場や補充・発展的授業を単元の中に位置付けている。複線型（課題や探求方法でのグループ別活動）や個別の課題追究の場を設けたり、単元の終末には、「おもしろ実験」と称して、学習内容と関連があり子どもたちの科学への興味を高めるような実験を行っている。

例 第6学年「水溶液の性質」では、リトマス紙の他にブドウのジュースやハーブティーを使ったり、クエン酸や炭酸水素ナトリウムを使ってサイダーづくりをしたりした。学期の終わりには、科学フェスタと称してプラカップやストローなどを使ったプラバンやスライム、べっこうあめ、電気パンづくりなどをコーナー別で行っている。

## 2 成果及び課題

今日も、子どもたちが、理科室に遊びに来る。「先生、不思議なチョウの幼虫見つけたよ。」「先生、今日はこの前の課題を実験するの。」と楽しみに来てくれる。そんな理科室を、これからも子どもたちにとって楽しい教室となるようにしていきたい。

## 3 その他参考となる事項

### 参考文献

文部科学省教科調査官日置光久監修 『理科4年生ワークシート』（東洋館 平成16年発刊）

文部科学省教科調査官日置光久監修 『理科発展的な学習・補充的な学習』（小学館 平成16年発刊）

斑鳩町立斑鳩小学校 e-mail ikarugac@m4.kcn.ne.jp



自分の願いや思いを伝え合うコミュニケーション能力を育てる

桜井市立纏向小学校 浦前 知佐子

1 実践内容

(1) 児童の実態

本校で生活実態調査を実施したところ、通塾やテレビ、ゲームのために、家庭でも会話がないうちの子どもの多いことが分かった。また、ゲーム機に長時間向かう子どもたちは、学習意欲やねばり強さに欠ける傾向があるという結果も得られた。このことから、コミュニケーション能力の不足は、生活経験から獲得されるはずの言葉の修得が十分でなく、表現力が育ちにくいのではないかと考えた。



(2) 指導の重点

国語科において、児童一人一人に確かな表現力を身に付けさせようと考えた。文学的作品を、自分の生活を通して課題を意識しながら読ませ、意見交流をして課題追究をさせることで、言語能力を高めることをねらった。また、話し合う過程で、お互いの考えを認め合い、人間関係の絆を深め、コミュニケーション能力を育てようとした。

(3) 具体的実践（文学的作品を用いた課題追究学習）

ア 授業の組み立て

(ア) 範読（全体）・・・あらすじを理解し、語句について調べる。

(イ) 一人読み（個別）・・・文章と対話しながら読み、感想をもつ。

(ウ) 初発の感想（個別）・・・自分なりに読みとったことや疑問に思ったこと、心に感じたことをノートに書く。

(エ) 感想交流（全体）・・・書いた感想を出し合い話し合うことで、個々の意見の違いや感じ方の違いに気づく。

(オ) 課題設定（全体）・・・意見の違うところや、もっとみんなで読み深めたいことを決める。

(カ) 課題追究・・・教材と出会い直し、課題に対する自分の読みをノートに書き、それを基に話し合う。

(キ) まとめの感想（個別）・・・(オ)と(カ)を繰り返し、自分の意見とみんなの意見を練り上げて作り上げた自分の考えをノートに書く。

イ 授業で大切にしていること

自分の生活を通して教材を読み、建前の感想ではなく、自分自身の生き方と照らして考えさせ、自分を振り返らせる。自分ならどうするか、なぜ自分はそう考えるのかを書くことで、自分を発見させる。その中では、ノートづくりでの一人一人への丁寧な支援が重要である。また、一人一人の子どもが安心して話せる学級環境が根底にあることが前提である。

ウ 授業を成立させるための基礎となる力

(ア) 聞く力

相手の声をただ聞くだけでなく、心を聴くことが相手を尊重することと捉え、うなずく、質問するなど必ず相手に反応することを習慣づけさせた。また、コの字型

の机配置など、聴き合える学習形態を工夫した。

(イ) 話す力

相手が受け止めているかどうかを確認しながら話すことを心がけさせ、声量・速さに注意させた。話を構成する型を示し、結論から述べて根拠を説明する論理的な話し方をさせた。子どもたち同士での言葉のやりとりを促進するために、相互指名を取り入れた。



友達の発言に反応しながら聞く

(ウ) 書く力

身近な日常生活を取材した日記文を一枚文集に載せ(年間200枚にのぼった)、朝の会で読み合った。この取材を通して相互理解を深め、人間関係を結ぶことができた。それとともに文章表記の方法を互いに学び合いながら、書く意欲を高めた。また、他教科でも文章記述の機会を多くし、書き慣れさせた。

(エ) 読む力

授業の中で、様々な方法で音読をする時間を設けた。また、家庭の協力を得て音読カードを用いて音読練習を日常化した。それを群読や劇に作り替えることで、集団で声を出す楽しさを味わわせた。また、本を読み終えるたびに読書紹介カードを書かせ、それを掲示して、読書への興味や意欲につながるようにした。

エ 家庭との連携

定期的に児童の生活習慣を調査し、表れてきた問題点について話し合い、協力しながら改善するようにした。また、音読カードに毎日一言感想を書き入れてもらい、児童の学習に関心をもってもらうようにした。

2 成果及び課題

自分の気持ちを主張するだけでなく、相手の気持ちを理解しようとする態度が見え、児童間のトラブルが減った。学級の雰囲気やゆったりとしてきた。また、授業での話し合いを楽しんでいる子どもが増え、筋道だった発言ができるようになってきた。書くことにも抵抗がなくなり、長文が書けるようになってきた。根気よく考える態度が育ち、持続力が増した。

課題としては、コミュニケーション能力の育成には、家庭での子どもの暮らしぶりが大きく影響することから、家庭との連携をより密にしていくことがあげられる。また、低学年からの一貫した取組の積重ねをするためには、全職員の共通理解・共通実践が必要なことである。

3 その他参考となる事項

参考文献

『人間理解を深める文学教材の読み』(東洋館出版社)

『子どもが自ら読み味わう文学の授業』(明治図書)

私は、国語の話し合いの時間が楽しみです。それは、みんなとじっくり考える、いろいろな考え方があって、時間がすぐにたってしまうからです。それに、前まで言えなかったのに、みんながいつしよけんめい聞いてくれるから、今は、発表するのがおもしろいです。

(三年児童の日記より)

今、求められている「読むこと」の学習

- 国語科『やまなし』『イーハトーヴの夢』(小6)を通して -

榛原町立榛原小学校 佐田 壽子

1 実践内容

(1) 実践の視点

ア 確かな言葉の力をはぐくむ。

付けたい言葉の力を吟味。個に応じた指導。

イ 時間数減に対応すること。

単元構成の工夫。読書活動との関連。

ウ 人とかがわり合って学ぶこと。

かがわり合うことを意図した授業の構築。



(2) 実践の概要

ア はぐくみたい言葉の力

叙述を味わったり表現方法をもとにしたたりしながら、作者の生き方や考え方について自分の考えをもつこと。

イ 単元名 「作品と出会う、作者と出会う」

ウ 教材名 『やまなし』『イーハトーヴの夢』(光村図書 小6 学年上)

エ 学習のながれ (全6時間)

第一次 『やまなし』『イーハトーヴの夢』の音読(教師)を聞き、はじめの感想を書く。(1時間)

第二次 個々が学習課題をもち、解決するために活動する。(4時間)

第三次 自分の読みを深化させたり、拡充させたりするために話し合う。

学習全体を振り返る。(1時間)

オ 実践のポイント

(ア) 短時間で二つの教材を読ませたこと。

「ふたつの教材を6時間で終わりたい。」と告げた。子どもたちに「叙述をもとに作者の生き方や考え方について考えることができる。」という言葉の力をはぐくむことがこの単元設定の趣旨であるが、この単元は作品、作者の伝記という構成になっており、二つをリンクさせて読むことでこれを実現できる。あくまでも『やまなし』を中心に読み進め、『イーハトーヴの夢』は資料として扱う。

(イ) 課題を解決するために、読みの視点を示したこと。

『やまなし』という教材の特性やはぐくみたい言葉の力を踏まえ、「文章構成」「題名のはたらき」「作者がつくった言葉」など11点にわたり読みの視点を示した。

(ウ) 個々の読みを交流するために話し合いをもったこと。

ほとんどの子どもたちが「宮沢賢治さんの伝えたいこと」を課題として一人読みを行った。話し合い(第三次)ではこれを話題として話し合わせた。

(エ) 「宮沢賢治についての研究」を継続的に行うことを計画したこと。

子どもたちには、本単元学習中も他の宮沢賢治の作品を持ち込み、読ませた。ま



た、夏休み中の自由研究の課題としても取り上げさせた。

## カ 実践の概要

(ア) [読みを深化させたり拡充させたりするために話し合う。] <第三次>

話題 = 宮沢賢治さんが伝えたかったことは

(代表的な意見)

- ・ 5月と12月とを対比させた。5月にはかわせみが出てきて怖い感じがするけれど、12月にはやまなしが出てきて豊かな感じがする。そのやまなしが題名になっているのだから豊かさのことを伝えたかったと思う。
- ・ 『イーハトーヴの夢』には「未来に希望を持つ」と書いてあった。やまなしからお酒ができた、イサドへ行こうとしていたりすることから、こういうことも言いたかったと思う。
- ・ 12月はやまなしが出てきて、ほがらかでやさしい感じがする。そして、『イーハトーヴの夢』には「力を合わせるには、たがいにやさしい心が通じ合っていないといけない。」と書いてある。賢治さんは、人々にやさしさを育ててもらいたいという願いをもっていると思う。



話題についての話し合い

(子どもの読みが広まったり深まったりした例)

子ども	話し合いをするまでの意見(第二次)	話し合いの後の意見(第三次)
1	・(意見がまとまらなかった。)	・豊か。やさしさやほがらかさ。未来に希望をもつ。
2	・家族の絆	・未来に希望をもつ。どんなにつらいやなことがあっても最後には幸せになる。
3	・やさしさを人々に育ててもらう。	・(自分の考えに自信をもった。)

(イ) [学習全体を振り返る。(意識調査)] <第三次>

本単元で身に付いた言葉の力とは

自分に付いたと考えられる言葉の力 (子どもが使った言葉で示す)

・発表する力 ・聞く力 ・友達の意見に対応する力 ・物事について質問したり深く考えたりする力 ・どれを調べるかを決める力 ・短時間で調べる力 ・よく読み  
大事などころだけをしっかりとらえる力 ・めあてに向かって読む力 (以下略)

## 2 成果及び課題

- (1) 成果 子どもたち、一人一人がこの単元で教師が付けたかった言葉の力を獲得したととらえている。
- (2) 課題 学習指導要領に示された言葉の力を身に付けさせるために、「読みの能力表」を作成する。読書との関連について研究を進める。

## 3 その他参考となる事項

参考文献 安藤修平監修『ことばと出会い伝え合う教室』(平成13年 東洋館出版社)  
佐田壽子著『小学校国語科学習指導の探究』(平成11年 溪水社)

榛原町立榛原小学校 e-mail el-haisho@mail.town.haibara.nara.jp

## 科学への関心を高める理科教育の取組

田原本町立田原本小学校 今西 明

### 1 実践内容

#### (1) 児童の学力の向上を図るために

##### ア 学級づくりの充実

児童の学力の向上を図るためには、学校生活や学習の基盤となる学級づくりが大切であると考え、自分の思いや願いを聞いてくれる担任の先生。何でも言える学級のなかま。そんな信頼感と安心感がある学級で、児童は、初めて全力で学習に取り組めるのである。担任は、すべての教育活動を通して、児童が安心して学べる学級づくりに全力をあげなければならないと考え、日々取り組んできた。



##### イ 理科教育の充実

理科教育の充実のためには、児童に科学への興味・関心を高め、基礎的な科学知識をしっかりと身に付けさせることが大切である。それは、単なる知識の積み上げではなく、観察・実験などの実体験を通して学ぶことが効果的であることはいままでのない。理科室で学習するときは、実験室の使い方や安全面をきちんと指導し、観察・実験するときは、何を目的として、どのように観察するのか、何の実験をするのか、などを事前にしっかりと理解させて学習に取り組む。そのような学習活動を通して、児童には、自ずと科学の大切な知識や技能が身に付いていくものである。そして私たち教員も授業に対する評価と課題を日々明確にしながら、児童にとって充実した理科指導をめざして取り組んできた。

#### (2) 教師集団との教材研究

理科を指導するのは難しいという指導者が少なくない。そこで、学年会などで「この単元ではこんなふうに展開すると子どもの興味・関心が高まる。」「こんな学習カードを使うと効果的だ。」などと、できるだけ指導法について話し合うことにしている。

例えば、3年の「チョウを育てよう」の単元では、モンシロチョウのたまごや幼虫の観察がしやすいように、学習園にキャベツを植えた。児童は、自分の目で葉の表面に付いている黄色いたまごを見付け、「たまごの大きさは思っていたよりすごく小さかった。」「たまごのそばに、かわいいよう虫の赤ちゃんがいた。」と、モンシロチョウに対する興味・関心が高まり、意欲的に学習に取り組むことができた。また、学習カードは、学年や学習内容によって、課題、予想、実験方法、結果、分かったことなどを記入できるようにすると、カードに書くことによって、1時間の授業のねらいや学習全体の



モンシロチョウのたまごの観察

流れを整理することになり、理解をより確かなものにすることができた。

すべて同じようにはできないだろうが、各担任の指導に少しでも参考になればと思っている。ときには、教材を学年の先生方と一緒に製作した。4年生には、「物のあたたまりかた」の単元で、液晶を使った金属の棒や板、サーモテープを張ったシートを実験室のグループの数だけ用意し、授業で活用したことがある。

### (3) 奈良県小学校理科教育研究会の運営

私は、長らく奈良県小学校理科教育研究会（以下奈小理）の運営に携わってきた。研究会の活動内容は、公開授業を中心とした学習指導研究会や、教員の実験・実技の技能を高める夏期実技講習会の開催、理科学力調査問題作成及びその調査結果の集計と分析、県下の先生方の理科実践の紹介や理科学力調査結果・分析の報告のための会誌「奈良県理科」の発刊などである。

また、平成16年には、10月28日（木）、29日（金）に開催された「全国小学校理科教育研究会奈良大会」の運営に、大会実行委員の先生方とともに取り組んできた。

### (4) 「青少年のための科学の祭典奈良大会」に参加

毎年秋に、「科学の祭典奈良大会」が開催され、奈小理としても協力している。県下各地からたくさん子どもたちが参加し、大盛況である。私も、工作・実験ブースで「空き缶トロンボーンをつくろう」「スライムをつくろう」「浮き沈みするさかな」などを出展し、科学のおもしろさを体験してもらえるように取り組んできた。

### (5) 「子ども科学教室」での指導

田原本町立図書館主催の「子ども科学教室」は、中央公民館で地域の子どもの科学への興味・関心を高めるために開催される。町内各小学校から参加があり、科学実験や物づくりの関心を高めるために指導してきた。

## 2 成果及び課題

自分本意の発言が多かった新学期から、友だちの意見にしっかりと耳を傾けて聴くことができるようになった3学期。そこには、学年の発達段階に応じて、科学への関心の高まりだけでなく、少しずつではあるが、自分で考えて行動できる児童の姿が見られるようになってきた。しかしながら現在、児童を取り巻く環境の変化は大変厳しいものがある。こうした背景のなか、今後も児童に対して本気で向かっていく姿勢を忘れず、教育に邁進したい。

## 3 その他参考となる事項

### 参考文献

奈良県小学校理科教育研究会、奈良県科学技術・理科教育推進協議会編集

『やってみよう ためしてみよう - 実験実技の手引き集 - 』

奈良県小学校理科研究会編集『奈良県理科 48号』

## 学習と評価の一体化を目指した教科ポートフォリオ

御所市立葛小学校 福本 義久

### 1 実践内容

#### (1) 絶対評価を実現するための学習指導

絶対評価が導入され、従来の相対評価から目標に準拠した評価へと転換することになった。この評価の在り方は、基礎・基本の確実な定着を目指し、学習指導の改善や指導と評価の一体化に活かすため、目標を明確にした学習指導を展開することを必要としている。目標を明確にするということは、指導者のみならず、学習者である児童一人一人が、「何を・いつまでに・どういう形で分かたりできたりするようになればよいのか？」ということを共有することで可能になると考えている。



#### (2) 自己評価にポートフォリオを活かす

私は、児童一人一人の学ぶ意欲を高めたり、学ぶ価値を意識化させたり、学んだ成果に達成感を感じさせたりすることが、児童の学力向上には欠かすことのできない条件であると考えている。このため教員は、メタ認知としての自己評価力を児童が身に付けることができる学習活動を展開していく必要がある。

そこで、私は、1時間の授業の目標と学習成果を子ども自らが照らし合わせて自己評価できる学習シートを作成し、それをファイルした学習歴を自ら俯瞰することのできるポートフォリオを導入している。

#### (3) 学習シートの工夫とポートフォリオの活用

学習シートは、『本時の目標』『学習成果』『自己評価』の3つのブロックに分割しており、原則として1時間あたりB4用紙1枚を使用している。

ここでは、「1時間の自己評価」という意味で「時己評価」としています。

『本時の目標』の欄は、指導者が評価規準として設定している事項を、児童にも理解できる容易な表現で提示し、意識化させるために「今日のゴール」として記入させる部分である。ここでは、本時の学習で何が分かたりできたりするようになればいいかを明確化する。学習成果の欄は、教科や単元の特性によって罫線や方眼、無地を組み合わせ形式を工夫し、



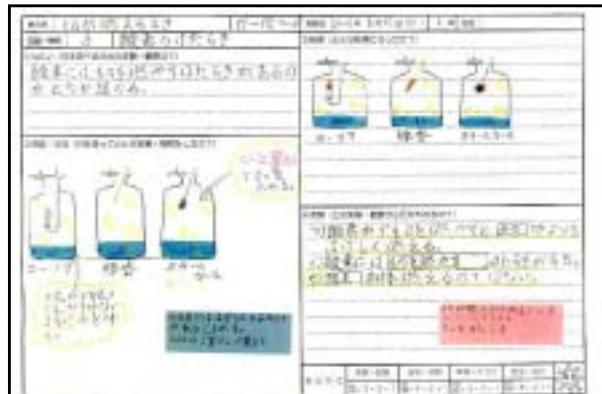
国語科学習シート(6年)

児童の思考や学習過程をまとめやすくしている。指導者の立場から考えると、この欄に1時間の学習成果が集約できるような授業を展開するために、定着させるべき基礎・基本をふまえた効果的な課題、発問や指示、板書計画、既習事項との関連などをしっかりと吟味しておく必要がある。児童の立場で考えると、到達すべき目標が明確なので、どの既習事項を基に考えればいいのかという見通しをもって学習したり、今考



えていることや解決しようとしている方法が、妥当かどうか点検できたりするという主体的な学習が可能になるのである。

『自己評価』の欄は、本時の目標と学習成果とを照らし合わせて自らの学習を振り返り、文章で簡潔に表現させている。このとき、児童は、「この時間で学習したことのどこが分かって、まだ分からないのは何なのか。」などと自問自答することにより、学習が内面化すると考えている。同時に、ここでは、学習に対する意欲や姿勢などについて自己点検させ、それらを基に次時への課題意識や学習意欲をもたせるようにしている。原則として授業の最後の5分間程度を自己評価の時間として確保している。



二次的な活用として、単元の終末には、単元の目標に到達することができたか、到達していないとしたら、どこがどれだけ足りないのかをポートフォリオを振り返ることで明らかにし、補充すべき内容を自らつかませるようにしている。



また、三次的な活用として、単元で学習したことを自分なりの視点で組み立て直してまとめることで、学習したことの定着が深まったり、新たな課題を見つけたりすることができる。

理科学習シート（上）と再構築例（下）

## 2 成果及び課題

ポートフォリオで「自分の学習を自分で評価することができるようになった。」という児童は、全体の81%にのぼった。また、ポートフォリオの良さとして、「今何を勉強しているかがはっきり分かるし、前のシートを振り返れば、どこで分かったかがすぐに見つけられる。」「1枚のシートで1時間が終わるので、まとめやすいし振り返りやすい。」「毎時間自己評価をするので、自分の成長が自分で分かる。」などを挙げていた。この結果からも、児童のもつ自己評価力が高まり、さらにその先にある 自己教育力 の芽も育ち始めていることが分かる。

低学年からこのような取組を系統的に積み重ねたり、教科や単元さらには時間ごとに学習シートを工夫したり、育った自己評価力を 習熟の程度に応じた指導 に活かしたりすることなどが今後の課題である。

## 3 その他参考となる事項

参考文献 鈴木敏恵著『こうだったのか!!ポートフォリオ』（学習研究社）

西岡加名恵著『教科と総合に活かすポートフォリオ評価法』（図書文化）

確かな学力の育成を目指して  
- 算数科の学習を通して -

五條市立阪合部小学校 河口 敬之

1 実践内容

今、学校では、基礎・基本の確実な定着を図り、それを基に自ら学び、考える力などの「確かな学力」をはぐくむことが求められている。

算数科の学習を通して「確かな学力」をはぐくむためには、子どもたちが自分から問題にはたらきかけ、広げていくという姿勢が大切である。つまり、自ら学び考える力を育てるために、子どもたちが、自分なりに算数をつくりあげていかなければならないと考える。



実践事例 6年「比例」より

(1) まず、教材研究ありき

この単元では、比例関係にあるものを中心に考察し、比例について学ぶことをねらいとしている。しかし、学習指導要領には「伴って変わる二つの数量について、それらの関係を考察する能力を伸ばす。」と、まず書かれている。ここからは、比例だけの学習をするのではないもう一つのねらいを読み取ることができる。

それは、「...それらの関係を考察する能力を伸ばす。」ことである。

そこで、学習課題を

一方の量が増えると、それに伴って他方の量も増えるものを見つけよう とした。

子どもたちが見つけてきた2量の関係は、次のようなものである。(抜粋)

ア 1皿に6個のたこ焼き。お皿の数が増えるとたこ焼きの数も増える。

イ 紙を半分に切り、重ねてまた半分に切る。切る回数が増えると紙の枚数も増える。

ウ 時速40kmで走る車の走った時間が増えると進んだ距離も増える。

エ 正方形の一辺が1cm増えると、面積も増える。

オ 3分間10円で話せる公衆電話なら、電話をかけた時間が増えるとお金も増える。

カ 弟の年齢が1歳増えると、5歳違いの兄の年齢も1歳増える。

子どもたちが見つけた2量の関係は、一方が増えれば、それに伴って他方も増えるものばかりである。しかし、子どもの意識は、それぞれの増え方の違いに向いていない。それは、量を見ている子どもと変化を見ている教師の見方の違いなのである。

(2) 子どもと教師の見方の違いを教材に

学びを子どもの主体的なものとし、自分なりに算数をつくりあげていくためには、子どもの見方(意識)にそった学習課題を準備する必要がある。時として、教師が考える指導内容と子どもの思考には違いが起こる。この違いを埋めるためには、子どもの素朴な疑問や気づきを基に学習課題を準備する必要がある。

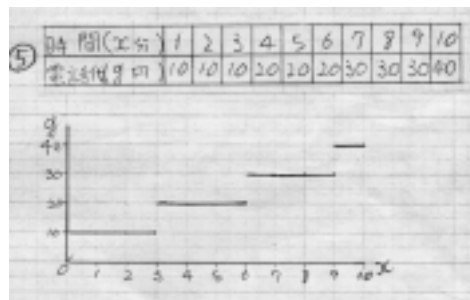
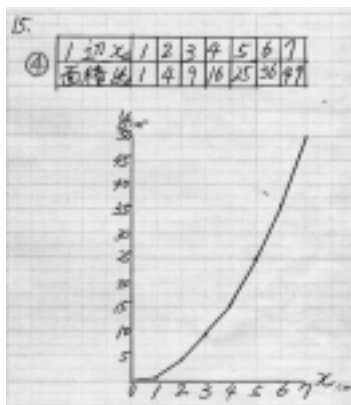
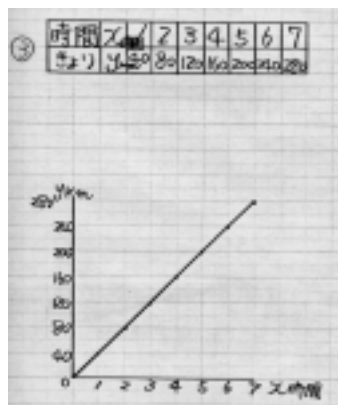
そこで、次の学習課題は、

増え方には違いがあるのだろうか とした。

子どもたちの反応は、「一方が増えたら、他方も増えるのだから増え方に違いなん

てない！」や「増え方の違いって何？」などであった。

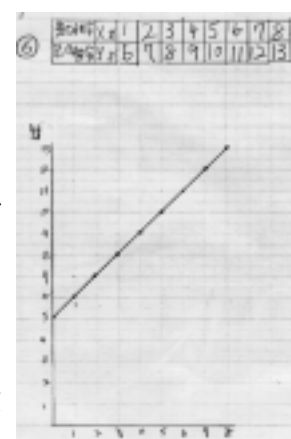
変わり方や変化を調べるのに適しているのは、「表」や「グラフ」であることを確認し、それぞれの2量の関係について調べ始めた。



2量の関係の表とグラフ(ウ・エ・オ・カ)

2量の関係を表やグラフにすることで漠然と見ていたものははっきりと分かり、増え方に違いがあることが明確になる。このことが「...それらの関係を考察する能力を伸ばす。」ことであると考える。

この学習後、ウのような場合を取り上げ、比例の意味や特徴について学習した。



## 2 成果及び課題

(1) 3つの視点を大切にされた教材研究を進めることが、確かな学力の育成につながる。

- 〔3つの視点〕
- ・ 基礎・基本を明確にした指導目標の作成
- ・ 子どもの主体的な学びを引き出す単元計画の作成
- ・ 指導と評価の一体化を図る評価計画の作成

当然、この3点は、関係付けながら作成していくことになる。

(2) 算数への関心・意欲・態度を高めることが、確かな学力を支える。

今回の実践事例では、日常生活の中から見つけた2量の関係を素材とし学習を進めた。算数科の学習が、いつも教科書だけに留まるのではなく、自分の生活の中に算数の内容を見つけ、活用できる子どもにしたい。そのことで、少しでも算数への関心・意欲・態度が高まればと考えている。

(3) 学習集団としての質の高まりが、一人一人の確かな学力を伸ばす。

学びは、一人一人違う。だから、個に応じた指導が大切である。しかし、集団の中で高め合い、個が育つのも事実である。授業の中で、互いに認め合い、考え合える集団としての質の高まりを育てなければならないと考える。

## 3 その他参考となる事項

参考文献 松原茂著『算数指導7つの視座～子どもの認知と算数の機微をどうとらえるか～』(東洋館出版社)



## 朝の校門指導の大切さについて

斑鳩町立斑鳩西小学校 植田 国男

### 1 実践内容

#### (1) はじめに

生徒指導は、児童一人一人のより正常でより健康な発達を援助するために必要な教育活動である。そのため、私は、生徒指導主任として、児童が学校生活にどうすれば適応していけるかということを中心に考えた。そこで、全校の児童に関わる場である校門での指導を大切にしたい実践を報告したい。



#### (2) 具体的実践

本校の児童は、学区の班で集団登校をする。私は毎日、校門に立って全校児童と朝のあいさつをする。子どもたちは、冬の寒い日は本当に寒そうに、雨の日はずぶぬれになりながら、また夏の暑い日は汗をべとべとにかきながら登校してくる。私も同じ気持ちになり、「おはよう。」と言いながら、「今日は、本当に寒いなあ。」「靴までべとべとやなあ。」「帽子まで汗でぬれてるなあ。」と、児童に声かけをする。全校の児童と気持ちが通じ合えるときである。生徒指導主任にとって、この気持ちが通じ合えることこそが大切である。この毎朝の声かけが、生徒指導の面で大変有効であると考えられる。それを以下のアからエで述べる。

##### ア 全校児童との人間関係を築く

校門指導により、全校の児童とふれあう機会があるから、全校の児童が日頃の私の話や注意をよく聞いてくれていると感じている。生徒指導主任は、全校の児童と向き合わなくてはならない。だから朝の校門指導で全校の児童の顔を知り、あいさつをしながら全校の児童との人間関係を築き上げることが大切である。

##### イ 児童一人一人の様子

本校では、「あいさつ」を生徒指導の年間目標の一つにあげ大切にしてきた。「あいさつ」は心の窓と言われている。朝、校門で元気よくあいさつできる児童は、今日一日がんばってやろうという気持ちの表れであり、充実した学校生活ができると考えるからである。自分から元気よくあいさつする児童もあれば、小さな声であいさつする児童、こちらから言わないとあいさつできない児童と様々である。今までの積重ねの成果だと思われるが、大部分の児童は元気よくあいさつできる。毎日立って見ていると、同じ児童であっても日によってあいさつが全然違う児童がいる。たぶん、その日の心理的な何かに左右されるのであろう。様子がおかしいと感じたときは、すぐ担任に連絡して様子を見てもらうようにしている。また、「君は、元気にあいさつしたよ。」「さんは、お母さんが校門まで送ってきたよ。」など、そのつど校門指導で得た情報を担任に伝えている。さらに、「登校途中に雨が降ってきたので、服を見てやってください。」「ポケットに手を入れる児童が増えたので、注意してください。」など全校児童に関わる情報があるときは、すぐに職員朝会で連絡して各学級で指導してもらうのである。

##### ウ 集団登校

朝のあいさつをしていると、一人一人の児童の様子とともに集団登校の様子も把握

することができる。例えば、集団登校の途中で何かもめた班は、校門に着いたらすぐに私の所に連絡に来る。話を聞いて私が解決するか、また学区担当に解決してもらった方がいいと判断したときは、学区担当に連絡して、休み時間に解決してもらう。このように登校途中で何か問題が起こっても、すぐに手立てをすることができる。集団登校は毎日のことである。些細な問題でも、その日に起きた問題はその日に解決することが大切である。

## エ 服装

児童の服装の様子も見るができる。服装の中でも名札と標準帽を大切にしている。私は、「たかが帽子や名札、されど帽子や名札。」と考える。なぜなら、名札や帽子は些細なことだが、この些細なことの指導が入れば、どんな指導も入ると考えるからである。1日目は注意し、続くと理由を聞く。直らないときは担任へ連絡して、いろいろな背景を考えて指導してもらう。



朝の校門指導の様子

ア～エのように、朝の校門指導によって、早期に全校の様子を把握でき、何かあれば学級担任や学区担当に連絡し、解決することができる。この全職員の「ハウ・レン・ソウ」の動きによって、全校児童が学校生活に適應でき、落ち着いた学校生活を送ることができるのである。

## 2 成果と課題

毎朝の校門指導によって全校児童すべての名前を知ることができ、校舎内で出会っても「植田先生、こんにちは。」とか、「植田先生、こんな虫がいたよ。」などと、全学年の児童から気軽に話しかけてくれる。また、注意する場合でも素直に聞いてくれることが多い。やはり、全校の児童と毎朝接することは、大変有意義なことである。

本校では、生徒指導委員会という組織がある。毎月1回各学年で問題行動を出し合い、全職員で取り組んでいく組織である。この中で朝の児童の様子を出すと、さらにいろいろな情報が集まり、生徒指導主任としてこれから全職員で取り組む体制をいかにして作っていくかを考えることができる。

集団登校については、いろいろな保護者の考え方もあるが、児童は毎日きちんと班で登校しているのは、朝に判明した問題を学区担当がすぐに解決している点が大きいと思われる。名札や帽子など、服装を朝きちんと整えていくことで、子どもたちは今日一日をがんばろうという意欲を持つと思われる。保護者からは、登校途中で何かあったとき、校門ですぐに事情を把握して対処してもらえるので、安心して登校させられるという意見もいただいている。

朝の校門指導で得た情報をもとに全職員で指導するという取組、さらに生徒指導委員会での取組が続く限り、本校の児童は学校生活にうまく適應でき、生徒指導がうまくいっていると思われる。

## 3 その他参考となる事項

- (1) 本校は、児童数404名で16学級の中規模校である。校区内の学区は全部で16学区あり、集団登校の班はさらに分かれて39班ある。
- (2) 斑鳩町立斑鳩西小学校ホームページ <http://www4.kcn.ne.jp/~ikarugaw/>

## 自分を大切にし、人も大切に作る児童の育成

五條市立北宇智小学校 藤井 利夫

### 1 実践内容

校長の学校経営方針の中に3つのキーワードがある。「挨拶」「読書」「継続」である。そこで、この3つの言葉を生徒指導にどうつなげるかを考えてみた。

子ども同士の人間関係を築く基礎は、自分を大切に作る子どもの育成であるとする。自分のことを考えることができれば、他人の気持ちも察することができるであろうし、それを言動に表せば良好な人間関係に発展するであろう。また、自分を大切に作るということは、自分を好きになることである。自分を好きにさせるために、人の役に立つ自分を自覚させ、自信を持って生活できるようにさせたいと考えた。

まず最初に、道徳で、「自分はなぜ生まれてきたのか。」をテーマに話し合う時間を持った。改めて「なぜ」と問われると、答えられず首をかしげる子どもが多くいた。そのうち、野球の得意な子が「プロ野球選手になるため。」と答えたことをきっかけに、将来のことや自分の得意なことに言及する意見が相次いだ。そこで、もっと身近なことから考えるようにさせたところ、「親が喜ぶ。」という声。「どんなときに喜ぶんだろう？」という問いに「テストで100点を取ったとき。」「言われる前に宿題を済ませていたとき。」「言われる前に風呂洗いをしたとき。」等々。「学校ではどうかな?」「1年生の給食当番のとき、1年生にありがとうと言われうれしかった。」「ケガをした子を保健室へ連れて行ったときに礼を言われてうれしかった。」などという声が上がった。自分の得意なことも将来の仕事も、家の手伝いも勉強も、学校での委員会活動や当番活動も、すべてみんなのためになっていることを再確認した1時間であった。

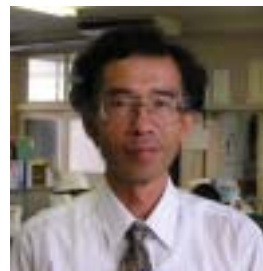
この1時間をきっかけにし、次の道徳の時間には「返事」や「挨拶」、「ありがとう」「ごめん」などの言葉も大事であるということを経験した。これらは今や家庭内でも交わされなくなっているようで、学級懇談での話題のひとつにして家庭での実践をお願いした。

自分を好きにならせるために、自信を持たせることも大事なことである。だから、「やればできる。」と子どもたちに言い続けている。水泳で25m泳ぎかねていた子は水泳ク



伝統の運動会での一輪車競技

ラブに入部して100m泳げるようになった。漢字50問テストで低い点数の子は何度も練習して92点を取った。分数の計算ができなかった子は放課後の学習でできるようになった。本校の運動会では6年生の伝統種目、一輪車の団体競技がある。一輪車に乗れなかった子が、毎日の努力が実り、どうにか入退場できるようになった。一輪車に乗れなくて、練習することすら敬遠気味だったこの子は、「もっと早く練習しとけばよかった。やればできるんやなー」と、うれしそうに話してくれた。「継続は



力なり」を子どもたちは実践してみせてくれている。これらのことをみんなの前で褒め、認めることで、次への意欲付けができたように思う。また、このことは、友だちの努力を目の当たりにすることで、友だちのよさを発見することにもつながっている。

また、始業前の10分間を読書タイムとし、担任も一緒に読書をする。子どもたちは読書をするので、登場人物と同化し心情を揺さぶられ、最終的には道徳心も育てられる。読むだけで心の栄養を補うことができるのである。そのおりに、簡単な感想を書かせ、子どもに配布した。その感想文を見て子どもたちは、「こんな見方があるのか。」「こんな風を書けばよく分かるんだな。」などの感想を述べている。



朝の10分間読書風景

## 2 成果及び課題

児童は、学校・家庭・地域を問わず、「ありがとう」という言葉をもらうことで、充実感や達成感を味わっているようである。最近では、朝、教室に入ると「おはようございます」という元気のよい声が聞こえるようになった。担任が出張のときには「行ってらっしゃい」の声も。子ども同士の教室の出入りの際にも、「行ってらっしゃい」「お帰り」の声が出始めた。徐々にではあるが、明るい挨拶ができるようになりつつある。これは人間関係を築く上で基本でもあり重要なことでもある。

最近6年生は、毎朝4名ずつ交替で校門付近に立ち、登校する下級生に元気よく挨拶する「挨拶し隊」を自主的に結成し、卒業まで続けようと張り切っている。

それまで何かができなくなった子どもも、毎日の継続によりできるようになっていく。一輪車に乗れない子に対し、乗り方を教える子どもが多く現れたが、運動会では、自分だけが乗れても無意味で、みんなで一輪車に乗って行進することに意味があると理解したからであった。

年々、集中力がなく忍耐力も乏しい子が多くなっているような気がする。しかし、10分間読書に集中することや、できるように努力し、少しずつ成果を出せるようになることで集中力や忍耐力がついてきている。10分間読書は、単にその時間だけ集中する力を付けるだけでなく、次の授業に移る切り替えの速さにも好影響を及ぼしている。言い換えれば、てきぱきと動けるようになってきたということである。

「やればできる」子どもが増え、それゆえ自信を持ち、人の役に立つ自分に充実感を感じている子どもも増えてきているようである。これからは、もっと自分の存在感を感じる生活を送らせるとともに、他人のことに目向けられるような取組を進めていきたい。そして、よりよい人間関係を築くことで充実した学校生活を送り、楽しい思い出をつかって卒業してほしいと願っている。

## 3 その他参考となる事項

五條市立北宇智小学校ホームページ <http://www.gojo-nar.ed.jp/kitauchiss/index.htm>



陸上競技を通して児童の生き生きした活動を引き出す取組について

- 学校体育と地域スポーツの連携の中から -

三宅町立三宅小学校 三宅陸上クラブ

1 実践内容

(1) はじめたきっかけと地盤づくり

3年前、本校に赴任した際、陸上クラブを担当したのが本活動をはじめの大きなきっかけになった。月に2回あるクラブ活動の時間と週2回の早朝練習では、目的をもって練習に取り組む子どもたちや体を動かすことが大好きな子どもたちが積極的に陸上競技に取り組んでいた。半面、学校全体では体力低下が顕著で、運動する機会をなかなかもとめない子どもたちも少なくはなかった。



そこで、陸上競技を通して子どもたちとかかわることで、意欲のある子を伸ばし、スポーツ好きの子どもを育てることを生きがいにしていけたらと思うようになった。

そのような中で、学校週5日制が実施された。陸上競技をもっと子どもたちに広めることができないかと考え、本校の校長や教育委員会と相談し、スポーツ少年団の部活動として陸上競技を毎週土曜日に実施することにした。

学校の陸上クラブを担当している同僚や、陸上競技の経験がある他校の先生にも協力を得、20数名の子どもたちを集めてスタートした。広く地域の子どもたちに活動機会を提供すること、地域の理解を得ながら地域で子どもたちをはぐくんでいくことを考えながら活動してきた。

(2) 活動内容と大事にしているもの

年々クラブ員も増え、平成16年度には約60名の子どもたちが陸上競技を楽しむようになった。陸上競技は個々の記録の伸びが大きな励みとなり、自信につながる。そこで、当初から競技会に数多く参加するようにした。年間15試合ぐらい出かけるが、その際に「自分のことは自分です」「みんなで協力して準備、片づけをする」などのきまりや公共の施設、交通機関を使うことで社会のマナーやルールを守ることを中心に指導してきた。競技会に行くことは自分の力を試し、ルールにのっとった中で活動することを学び、社会の仕組みや社会の中で生きていく力をつけるいい機会となった。いろいろな方に支えられ、お世話になりながら陸上競技を楽しんでいることに感謝の気持ちをもって「ありがとうございます」「よろしくお願いします」が言えるようにしていくことも大切なことだと考えている。

また、地域で子どもたちをはぐくむことを考え、卒業後の進路になる校区の中学校へ練習に出かけ交流もしている。スポーツを小学校だけの枠で終わらせるのではなく、生涯にわたってスポーツに携わる人間をつくることにこだわっている。

校区の中学校との交流により地域でのたてのつながりができ、陸上クラブの活動を数多くの人に理解していただける機会にもなると考えている。先輩のすばらしい走りや跳躍の姿を見ることは、子どもたちの励みになり、陸上競技を楽しむ目標にもなっ

ている。

現在小学校2年生から6年生までの子どもたちが活動しているので、体格や運動能力に差があり、興味関心を高める工夫や練習量についても加減が必要である。小学校時代はさまざまな運動体験が必要だと考え、走る、跳ぶの運動をまんべんなく行っている。時には、上級生が下級生を教えることもあり、よい仲間づくりができています。

月に1回校内記録会を実施し、記録の伸びや今後の目標づくりに役立てているとともに、夏には1泊2日で合宿を実施している。今年度は下北山のスポーツ公園を利用し、練習はもちろんのこと、集団生活の大切さや仲間づくりも兼ねた合宿となった。

保護者の理解や協力も非常に大きな力になっている。毎月、陸上クラブ通信を発行し、子どもの様子や練習の紹介、家庭への協力依頼などを伝えている。練習の見学、試合への応援も積極的に呼びかけ、競技会の記録証やベスト記録証をチームから発行し、子どもたち自身が自分の力の伸びを実感するとともに、保護者にも子どもの伸びをしっかりと伝えるようにしている。

さらに、規則正しい生活や食事についても、子育てという意味で協力をお願いしている。健康づくりセンターの管理栄養士を招いて、児童期のスポーツに必要な栄養指導の講演会を行い、スポーツを通しての子育てについて学習会も行っている。

## 2 成果と今後の課題

活動を通して子どもたちの運動能力は格段に上がり、全国大会に出場する児童も出てきた。練習へもクラブ員のほぼ全員が参加するようになり、生活リズムも安定し、集団行動やきまりを守って行動できるようになってきた。クラブ員の増加により、指導者の確保が今後の課題である。きめ細かな目で子どもたちを見られるような体制をつくりたいと考えている。また、運動好きの子どもたちを一人でも多くつくるため、陸上競技を通して運動の基礎づくりを行い、体づくり、体力づくりを高めていきたいと考えている。さらには、三宅町だけにとらわれず、周囲の市町村と連携をしながら陸上競技だけに終わらず、スポーツ活動の種類が広がり、児童が生き生きと楽しく活動することができればと考えている。



チームのモットーは全力疾走！！



チームの雰囲気は明るく・楽しく

## 3 その他参考となる事項

- (1) 三宅町ホームページ <http://www.town.miyake.nara.jp/>
- (2) クラブ構成員 大前洋介、吉岡初明、高橋綾子（三宅町立三宅小学校）、  
中山靖雄（天理市立前栽小学校）

追究する力、かかわる力、表現する力を高める総合的な学習の時間  
- 世界へ発信 桜井市ガイドブック作り -

桜井市立桜井南小学校 明島 祐見子

1 実践内容

総合的な学習の時間は、子どもたちの「生きる力」をはぐくむことを主なねらいとしている。本実践(6年生)では、「世界へ発信 - 桜井市ガイドブック作り」というテーマのもと、この「生きる力」を育てる学習として、次の3つの視点から迫る学習を組み立てて取り組んだ。



ア 自ら課題を見つけ、自ら考え追究して問題を解決する学習(追究する力)

イ 体験活動を通して、豊かな心を養う学習(かかわる力)

ウ コンピュータ活用や英語活動を通して表現する力を養う学習(表現する力)

「追究する力」では、自分で課題を見つけ、課題解決に向けてよりよい方法で取り組んでいく力の育成をねらいとしている。「かかわる力」では、地域・人・自分のよさを発見し、友だちや地域の人と好ましい人間関係をつくろうとする態度の育成をねらいとしている。「表現する力」では、自分なりの思いや考えを様々な方法で他へ伝えることができる力の育成をねらいとしている。具体的な実践は、以下のとおりである。

(1) 地域調べ学習

ア 児童が桜井市という地域に関心を持ち、「桜井市ガイドブック作り」を通して、主体的な体験活動、探求活動を進め、追究していくような支援の在り方

(ア) 児童に共通課題の意味を十分に理解させ、個人の課題を設定していく話し合いの時間を充実する。

(イ) 自己評価カードを活用し、調べ学習の計画を立てたり、分かったことをまとめたり、新たな課題などを整理したりする。カードは各自のファイルに保存し、今後の自らの学習の指針となるようにする。

イ 地域素材・地域の人材の発掘、教材化を進め、児童が主体的に地域とかかわり、人とかかわっていくような支援の在り方

(ア) 学校の周りや地域にある神社・寺などの文化的遺産を紹介したり、埋蔵文化財センターなどの教育的な施設を活用したりする。

(イ) ボランティア先生を募集するプリントを地域に配布し、活用する。

(2) コンピュータ活動

ア コンピュータに慣れ親しみ、操作技術を高める指導方法

(ア) 情報教育の一環として、コンピュータ活動を年間21時間設定し、学年ごとの目標を決める。

(イ) ボランティア先生を活用する。

(ウ) 多目的ホールに、保護者から提供を受けたコンピュータを配置し、自由に使用できるような環境づくりをする。



コンピュータ活動



イ コンピュータを使い、情報を集めたり自分の意見や考えをまとめたりして、それらを表現することができる支援の在り方

(ア) 視聴覚室に設置された20台のコンピュータを2人で1台使用し、インターネットを利用する上でのルールなどを学習して情報活用の実践力を育成する。

(イ) 相手を意識したよりよいまとめ方、伝え方を考え、コンピュータを使って主体的に自己表現ができるようにする。

### (3) 英語活動

ア 英語の音に慣れ親しみ、コミュニケーション力を高める指導方法

(ア) 国際理解教育の一環として、英語活動を年間29時間設定する。

(イ) 聞く・話すことを中心に、単語よりセンテンスを重視して英語活動を展開する。

(ウ) NHK教育番組「えいごリアン」「えいごリアン2」に出てくる40の基本表現を軸として、年間計画に基づいて授業を進める。

イ Assistant Language Teacher (ALT) と学級担任の効果的な連携の在り方

(ア) ALT と学級担任による T.T. (Team Teaching) 形式の授業が11時間、学級担任による指導が18時間で授業を行う。

(イ) 英語活動担当者がALTと打ち合わせを重ね、学級担任が中心であることを意識しながら授業を展開する。

ウ 児童が楽しく英語に触れられるような教材・教具・ゲームなどの開発

(ア) 教室や校内環境として、英語を用いた掲示や、校内放送で外国の音楽を流す。

(イ) 児童が各自ピクチャーカード(英語DEカード)を購入し、カルタとり、フラッシュカードとして活用する。

(ウ) 図書室に英語版の昔話やゲーム集などを購入し、自由に閲覧できるようにする。

## 2 成果及び課題

(1) どうすれば分かりやすい桜井市ガイドブックになるか、課題解決的な学習や体験的な学習を取り入れたことで、児童が課題に沿って主体的に取り組むことができた。

(2) 調査活動では、グループで分担して作業を進めることにより、友だちの力強さを再発見することができた。また、訪問先での地域の人たちとの会話やボランティア先生の専門的な話には感動する場面も多く持つことができた。

(3) 修学旅行先で、直接外国の人と英語で会話をするという機会を設けたことにより、自分に自信を持ち、生き生きと活動する子どもが増えてきた。

(4) ポートフォリオの蓄積から児童が自分の学びを振り返り、次の学びに生かすという点が不十分であった。ポートフォリオ評価の効果的な活用をいっそう図り、児童自らが学習過程や成果を正しく評価し、さらに新たな方向性を生み出せるような支援の仕方を考えなければならない。

(5) 調査活動では、更にボランティアの協力体制も整えなければならない。

## 3 その他参考となる事項

### 参考文献

国立教育政策研究所教育課程研究センター編『総合的な学習の時間 実践事例集』

高階玲治編『実践 総合的な学習の時間』(図書文化)

高橋勲著『子供&教師のコンピュータ授業』(明治図書)

地域にふれ、地域を感じることから心を育む取組について

- 上北山をもっと知ろう、もっと調べよう -

上北山村立上北山小学校 杉本 勉

1 実践内容

上北山小学校は、紀伊山地の奥深く、台高・大峰の山々に囲まれた谷あいにある。他のへき地の例にもれず、年々過疎化が進み、児童数も減少の一途をたどっている（平成15年度33名）。

このような中、学校の目標「北山っ子、心育みよりよく生きる - ふるさとから21世紀への発信 - 」「自ら考え、ねばり強く取り組む子の育成 - 地域にふれ、地域を感じるこども - 」のもと、「総合的な学習の時間」に取り組んできた。そして、少人数の特性をフルに生かしながら「ふるさと上北山」に迫る学習を進めている。ここでは、平成15年度の6年生の活動について報告をする。

5年生時（平成14年度）、「伝えよう、上北山のよいところ」というテーマのもとで大台ヶ原の取材を行った。その中の大蛇ヶ原で、岩頭に座った子どもたちは、眼下の東の川、遙か対面の大峰の山々等、眼前に広がる景色に心を奪われ、その場をなかなか立ち去ろうとしなかった。また、秘境西大台では長く厳しい道のりを目を輝かせながら歩き通した。普段、清らかな流れ、豊かな緑に囲まれて暮らしている子どもたちではあるが、自分たちの住む上北山のすばらしさを改めて感じたようであった。

6年生になって（平成15年度）、上北山の地形図や年表からテーマを探した。当初、子どもたちは、大峰の山々については全くといっていいほど知らなかった。昨年、大台ヶ原から、飽きることなく眺めていた峰々が、上北山であることすら認知していなかったのである。このような中であつたが、地形図を見ながら、また、指導者の言葉かけなどから、上北山に近畿最高峰の山（八剣山）があること、謎めいた名の無双洞・底無井戸、スキー教室の時、和佐又山スキー場から見える真っ白な山など、大峰山脈を中心に心を引きつけるいくつかのことが浮かび上がってきた。5年生時の大台ヶ原で受けた感動が心に残っていたこともあつたのだろう。



「私たちの大峰・大台」の原点、大蛇ヶ原にて

感動が心に残っていたこともあつたのだろう。自らが大峰の山や谷に分け入り、それらの場所を肌で感じることからふるさと上北山に迫ることになった。さらに、聞いたり調べたりしたことを本にして、多くの人に広めようということになり、昨年度取材した大台ヶ原を合わせ、タイトルを「私たちの大峰・大台」として取材を進めることとした。

活動には本格的な登山も含まれるということから安全面での支援が重要なものとなった。下見はもちろん、ゲストティーチャーに保安的な役割をお願いしたり、担任以外の先生にも協力をしてもらうなど十分な引率人員を確保した。また、長く厳しい道のりを無理なく歩き通せること、落ち着いて取材ができることなどを考え、日帰りでも往復が



可能な行程を一泊二日とし、ゆとりをもって行動できるようにした。このような安全面、体力面での対策は、活動の趣旨や意義を知らせたり、子ども自身が思いを伝えたりすることと合わせ、家庭の深い理解と大きな協力につながっていった。

取材日については、学校行事の合間をぬい天候などの諸条件を考えながら決めていくことになる。このような事情から、現地取材の計画については子どもの思いを十分取り入れながら指導者主導で行い、子どもたちは大峰の山や谷を肌で感じながら取材に専念できる態勢をとった。また、「私たちの大峰・大台」の「私たちの」を意識して取材することを助言した。こうして、6月無双洞、9月大普賢岳・底無井戸・和佐又山周辺、10月八剣山と続いた大峰の山や谷の取材は、無事終了した。

3学期、「私たちの大峰・大台」は、卒業記念制作という形で完成した。計画から取材、紙面作り、編集、製本と、子どもたちが手がけた冊子は、拙いものではあるが、「総合的な学習の時間」が求める力とともに、子どもたちの心に残したものの大きさを感じさせる冊子となった。



## 2 成果及び課題

ふるさと上北山の大自然を調査した活動 小冊子「私たちの大峰・大台」を卒業式に展示は、子どもたちに新鮮で大きな感動を呼び起こした。達成感や成就感を味わったこととあわせ、子どもたちの「感性」は大きく伸びたように思われる。また、新たな発見や問題点を見だし、次に自分たちが為すべきことを考えようとする児童も出てきた。活動に必要な基礎・基本の力を子ども自身が気付いたことも収穫といえる。このように、大きな成果があった反面、いくつかの課題も残った。まず、取材地の特殊性から子どもたちに試行錯誤させながら活動させることが難しく、指導者主導の場面が多くなることがあげられる。再取材が難しいことから、主体性にだけ任せておくわけにはいかないという指導者の思いからである。次に、安全確保のためには十分な引率人員が必要となることである。ただ、今回は地域の方々の協力を得ることができ、必要十分な取材活動ができた。

今後も学校と地域・保護者の連携で子どもを育てるという意識を持ちながら、子どもたちの活動を支援していく態勢を維持する必要がある。

## 3 その他参考となる事項

### (1) ゲストティチャー等、協力していただいた機関・施設

上北山村教育委員会	上北山村河合	07468-2-0001(代)
大台ヶ原ビジターセンター	上北山村小椋	07468-3-0312
和佐又スキー場	上北山村西原	07468-3-0027
弥山小屋	天川村坪内	0747-52-1332・0747-63-0236

### (2) 冊子「私たちの大峰・大台」 問い合わせ先

上北山村立上北山小学校 07468-2-0035 e-mail [kamisyou@oak.ocn.ne.jp](mailto:kamisyou@oak.ocn.ne.jp)

「地域に出会い・ふれあい・学びあう」

桜井市立上之郷小学校 坂本 悦子

1 実践内容

(1) はじめに

上之郷小学校区内には多くの伝統が残っているが、差別につながるものがある。また、過疎化問題が深刻で、ふるさとから出ていく若い世代の人々が増え、人とのふれあい、地域とのふれあいがなくなっている。そこで、昔からの伝統ということで簡単にかたづけるのでなく、一つ一つの事実に対して疑問をもち、立ち止まり、考える力をつけていきたい。



(2) 「なぜ女の子は太鼓台に乗れないのかな？」(1999年度～2000年度、低学年での取組から)

女性を神社の祭礼や仏教の行事などの場から排除するという因習がいまだに根強く残っている。

ア 「何でやる？」の劇の取組

生活科の学習の中で、地域の秋祭りを調べていくと「女の子は太鼓台に乗れない。」というのである。「何でかな？おかしいな？」といった疑問が子どもたちの中からわきあがった。

このとき子どもたちが疑問としてつぶやいた言葉を劇にして、その思いをみんなにわかってもらいたいという願いをもって解放祭(現：桜井東人権祭)で発表した。

イ 「わしら、差別してんのと違うで。」

地域の人の中には「この先生け！祭りのこと言わはった人。わしら差別してんのと違う。」「昔から続いてきたことやから仕方ないしな。年寄りもいることやし。」「もうちょっと待っててや。何とかいけるようにしたいけどな。」といった声を祭りの神輿が来るのを待っている私に伝えてくださった。

ウ みんなで太鼓台に乗れたよ

(3) 踊りの継承(2002年度高学年での取組から)

毎年8月18日に「風鎮祭」と「盆踊り」が行われているが、踊りは今では伝える人も少なく地域から忘れ去られようとしている。消えつつある伝統文化と地域の人々とのふれあいを大切にしたいと考え、地域の方に踊りを教えてもらうことにした。そして、地域の人たちが集まる運動会で一緒に踊ることにより、子どもたちが感じた地域の文化のすばらしさを、おとなも含めてみんなに感じてもらう場とすることができた。

ア 郷土学習オンステージ

2002年12月7日、桜井市民会館において、「第21回人権文化を育てる市民の集い」が開催された。その中で「郷土学習オンステージ」と題して全校児童が出演し、上之郷の自然や伝統等について調べた「やまびこ学習」でのさまざまな人たちと出会いや語り、一緒に考えたことをひとつのストーリーとしてまとめ、発表した。

イ 桜井東人権祭

被差別部落に対する差別意識がもたれてきた背景を見ていくと、その多くが周りか

ら「聞かされる」ことによって意識が刷り込まれている事実がある。だからこそ、できる限り多くのおとな（特に高齢者）にも、発表や展示を見てもらい、交流やふれあいを通して地域の人々の真の姿や願いを知ってもらいたいと思い、地域ぐるみでの参加につなげていった。

(3) 出会いとふれあいの輪の広がりを求めて（2003年度中学年の取組から）

自然に恵まれたこの地域は、山菜の宝庫でもある。山菜を料理したり、薬草の効能を調べたり、干し柿作りやわら細工など、地域の人たちにたくさん教えていただいた。このように地域の高齢者の方ともふれあうことで、人とのつながりを大事にしたいと思い、老人会の方との交流を図った。

ア 「もう帰るんか。今度はいつ来るの？」

交流を重ねることで、高齢者の温かい気持ちや優しさにふれ、自分たちの思いも伝えられるようになり、神社や公園の掃除のときも会話が弾むようになった。

また、子どもたちの発案から、おじいちゃん、おばあちゃんに学校で育てたさつまいもで「いもまんじゅう」を作って持っていった。掃除のあと、一緒に食べながら学校生活のことを楽しげに話し、交流を深めることができた。子どもたちは、普段味わえない穏やかな時間や人とかかわる心地よさを感じるとともに、地域の高齢者の方も子どもたちとふれあう時間を楽しみにしてくださるようすが感じられた。こうなると、高齢者の方の子どもたちへの見方は変わってくる。「今の子どもは挨拶もようしゃん。」「どこの子で？」から「もう帰るんか。今度はいつ来るの？」と気持ちが変わってきて、次の交流を楽しみに待ってくださるようになった。

## 2 成果と課題

活動のようすをふり返ったとき、子どもたちには次のような成長が見られた。

- (1) 友だちと協力し励ましあって活動できた体験から、一人一人の友だちのよさを見つけられるようになった。
- (2) 人々のぬくもり、自然や文化のすばらしさを学んできた子どもたちは、自分たちのふるさとを誇れるまでに成長することができた。
- (3) これまでの取組を通して、自信をもって生活する姿が各場面で見られるようになった。そして、この自信は、教科学習の中でも生かされた。
- (4) 子どもと高齢者、高齢者同士のふれあいの輪が広がり、お互いが心を通わせていける人間関係づくりができた。

一方、地域に目を向けたとき、差別につながる因習や習慣に対して自分から変えようとしないうる姿勢から、自分の主張だけを通すのではなく、若い世代や子どもの意見も聞く中で地域をよくするためにできることはないかと、前向きに考えてくださるようになった。それが、今まで以上に学校に協力してくださる姿に表れているように思う。まさに学校と地域が近くなった姿がそこにあると実感することができた。

教育は学校だけでできるものではなく、今や学校と地域が手を携えて子育てをしていく時代に来ている。これからも地域ぐるみで子育てをしていく視点を持ち続けて、取組を続けていきたいと思う。

## 3 その他参考となる事項 特になし



## 情報教育の推進と教育の情報化（IT活用を中心として）

奈良市立三碓小学校 武田 克之

### 1 実践内容

担任教員のコンピュタリテラシーに関係なく、子どもたちに情報活用の実践力をつけていくために本校における情報教育のシステムの構築に尽力してきた。中でも、平成14年度と平成15年度の2年間、奈良市情報教育推進モデル校の指定を受け、基礎資料として上記主題と同名の『情報教育の推進と教育の情報化』（平成14年6月文部科学省）を用い、学校教育全般における情報化の推進を図ってきた。



#### (1) ハードウェア面での環境整備

限られた予算の中でより効率よく整備を進めるために、校内LANについては市で予算化されているものを除いて、工事を手作業で進めた。また、コンピュータ本体については、地域・保護者にプリントを配布し、家庭等で不要になったものを寄贈していただき、一台でも多くのコンピュータを確保するようにした。このことによって、視聴覚室や図書準備室にコンピュータを常設できるようになった。



視聴覚室に常設したコンピュータ

#### (2) ソフトウェア面での環境整備

子どもたちにとって使いやすいインターフェイスを持つことと、他の学校との互換性を考慮してソフトウェアの購入を進めた。また、コンピュータを使っていると、必ずといってよいほど、フリーズしてしまったり、システム上のトラブルが起こったりするため、恒常的に基本ソフトウェア（システムソフトウェア）の保守・管理・更新を行い、できる限り快適な環境で学習を進めることができるようにしてきた。

#### (3) 情報教育のカリキュラムの策定と全学年・全学級におけるコンピュータ室の活用

まず、必修となった中学校技術家庭科「情報とコンピュータ」の内容や、高等学校における必修教科「情報」との接続を考慮した情報教育カリキュラムを策定した。第1学年で初めてマウスを触ることから、高学年でのビジネス統合ソフトウェアの基本操作やインターネットの活用、あるいは著作権関連の知識や情報の信憑性の確認等、ルールやマナーをはじめとするメディアリテラシーの育成まで、児童が楽しみながら無理なく発達段階に即して技能を習得していくことができるように配慮した。

#### (4) 教職員におけるIT活用力の向上

上記『情報教育の推進と教育の情報化』を抜粋したものを全教職員に配布して周知を図り、プレゼンテーション力を中心にIT活用の実践力を高めてきた。

日常的にコンピュータを使うと、分からない内容や、様々なトラブルが発生する。そのことによって、コンピュータを活用することに対する抵抗感が強くなることがよ

くある。そのため、ハード・ソフトの両面において、教職員個別のサポートにもあたることによって、コンピュータを使うことへの抵抗感を払拭することに努め、「コンピュータを使って指導できる教員」の育成に努めてきた。

## 2 成果及び課題

### (1) 児童の状況

第1学年の入門期から系統的な学習活動を積み上げてきたことで、ほとんどの児童たちは発達段階に応じて「情報活用」における知識・技能・態度を身につけてきており、「調べる方法」や「まとめる方法」「発表する方法」等それぞれの場面において、コンピュータを活用することを選択する児童が増えてきている。



第1学年から系統的に指導

また、教科の学習においては、コンピュータを活用することで児童の視覚に訴え、内容の理解を促すばかりでなく、学習の定着が難しい状況にある児童に対しても、個別に指導する時間を確保することで役立っている。

しかし、児童2人に1台のコンピュータという学習環境の制約もあり、得意な児童に依存する児童の姿も次第に見られるようになってきている。したがって、学習環境と指導内容を整えることによって、真に「すべての子どもたちに情報教育を保障すること」を進めていく必要がある。

### (2) 教職員の状況

本校における教職員のIT活用の現状は、研修の積み上げの中で「コンピュータの操作ができる」ということでは、一定の成果を上げてきた。また、各種研修会等に主体的に参加する教職員も増えてきている。それとともに、学習活動に活用する機会も増えてきている。

しかし、毎年度末の調査からも、まだ十分に教職員間の較差を埋められたとはいえない。すべての普通教室に情報機器が導入される時期が目前となってきていることを踏まえ、「コンピュータを使って指導できる」力量を培い高めていく必要がある。

### (3) 中学校区連携の状況

中学校区における教育内容の連携については、情報教育担当者間での情報交換や意見交換に留まっている。小学校間連携を強化することで小学校段階の教育内容を中学校区で整え、中学校における情報教育を推進するための土壌を整える必要がある。

## 3 その他参考となる事項

奈良市立三碓小学校

<http://www.naracity.ed.jp/mitsugarasu-e/>

文部科学省「情報化への対応」[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/main18\\_a2.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/main18_a2.htm)

外務省「ケルン憲章」

[http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/summit/cologne99/g8s\\_sg.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/summit/cologne99/g8s_sg.html)

日本基礎学習ゲーム研究会

<http://www.edu-game.com/>



## 効果的な会議の進め方について

奈良市立朱雀小学校 石川 哲史

### 1 実践内容

授業で教壇に立っていたころから、「話しことばによる表現力の育成」及び「効果的な話し合いの進め方」をテーマとして教育活動に取り組んできた。

昨年度からは、教頭職として授業で培ったノウハウを駆使して、学校運営を効果的に進めるためには、会議や研修をどのように行えばよいのかを考え、試行錯誤しているところである。



#### (1) 国語の学習としての実践

従来より未来に生きる子どもたちに、今是非とも養成しなければならない能力・技能は、「音声言語の表現力の育成」であると考え、実践を続けてきた。また、「話し合いにより物事を解決していく能力」を国語の学習の中でいかに身に付けるかについて実践を通し考えてきた。

平成元年度に奈良市の研究指定校を受けた際には、ディベートを国語の時間に取り入れた授業を試み、それ以後、主として小学生を対象に実践を続けてきており、その成果は、『ディベートで話しことばを鍛える』にまとめた。

#### (2) 学級経営に話し合いの技能を生かす

会議の進め方にも様々あり、目的に応じて、それにふさわしい方策をとらなければならない。学級経営においては、子どもたちに「話し合いの技能」を教え、話し合いにより問題を解決することのできる能力の育成をめざし、練習と実践を繰り返してきた。



本校のビオトープ

#### (3) 学校運営における実践の試み（平成16年度）

決して独断専行になることなく、環境づくりのプロジェクトを遂行するためには、概ね以下のような会議の進め方が適当であろうと考え、試行錯誤しながら実践に移している。

年度始めに「ビオトープを拡張しよう」とのアイデアが出たことから、取組が始まった。

ア 現状分析・情報収集・アイデアを出し合う段階（個人から全体へ）

学校の環境整備について、「事業を推進するための組織とどの場所をどのように活用するか」を記入する用紙を全員に配布し、記入してもらったところ、ビオトープのみならず様々なアイデアが出された。

(ア) カードの活用：個人としての思い付きを全て書き出す。1枚1項目が適当。

それぞれの提案者が説明した。その後、時間がとれないこともあり意見を掲示するボードを置き、いつでも誰でもアイデアを出せる場を設けた。

(イ) ブレインストーミング：数人が集まり情報を出し合う。非難はしないのが原則。

(ウ) バズセッション(6・6討議法): 少ない人数で意思の疎通を図りやすい。

イ 個々の情報を組み合わせ、新たな発想を生み出す段階

貼り付けられたカードを見ながら様々な視点から検討を加えた。賛否両論に分かれるところもあり、参考となる図、材料や予算等の資料も出された。

各プロジェクトのリーダーは、出された資料を参考に、具体的な計画を練り、全体に提案した。



(ア) カード式ブレインストーミング

いつでも誰でも出された内容が把握でき、書き加えることが可能。

内容別に分けられたカード

(カード式ブレインストーミング)

(イ) KJ法

カードに書かれた内容を有機的に関連付け方向付ける。

(ウ) ディベート

二者択一を迫られた場合の討議方法。様々な観点から質疑応答し、決定に至る。

ウ プロジェクトチームを組織し、実践に移す段階(全体からチーム・個人へ)

チームリーダーは、計画や仕事内容等の段取りを作成し、知らせる。個人個人は、参加、協力できるところを考え、各々の役割を果たす。

「できる時にできる者で」という体制で進めている。まだまだ、全てのプロジェクトの実現には至っていない。(平成17年1月現在)

## 2 成果及び課題

- ・ 学校の環境整備の推進、研究推進の実践等において、アイデアを出す段階から、話し合いによる解決を図り実践に至らせたいが、十分な時間をとれないのが実状である。
- ・ 環境整備についていえば、ブレインストーミングにより、アイデアを出し合い、また、その情報をいつでも誰でも見られるようにしていたところ、細部にわたる問題点が指摘され、実現に向けた方向性が見えてきた。
- ・ 一部の担当者に任せてしまうことなく、職員全員が理解し、納得し、参画意識を持ち、積極的に取り組めるような適切な話し合いの手法と機会をとらなければならない。
- ・ 任せただけからは、そのリーダーの指示に従い、サポートに徹する度量も必要であるが、なかなか至難の業である。
- ・ 教職員が一致団結してプロジェクトを推進することの難しさを痛感している。

## 3 その他参考となる事項

参考文献

高橋誠著『会議の進め方』(日経文庫381 日本経済新聞社)

石川哲史著『ディベートで話しことばを鍛える』(明治図書出版)

奈良市立朱雀小学校ホームページ <http://www.naracity.ed.jp/suzaku-e/>

## 本好きな子どもを育てるために 読書活動推進を通して

葛城市立忍海小学校 中川 和代

### 1 実践内容

近年、子どもたちだけでなく、大人たちの活字離れも大きな問題になっている。そこで、一人でも多くの子どもたちが、図書室を利用して本に親しみ、本の好きな子どもたちとなるように、読書活動を推進してきた。



#### (1) 図書室の整備

図書室の管理業務をコンピュータ化し、2つの図書室を設けた。図書室1は、読書センターとしての機能をもたせるため、物語、絵本、伝記等読み物中心の図書を配架し、図書室2は、学習・情報センターとして利用できるよう、調べ学習に必要な本や事典を配架した。また、書架にも様々なコーナーを設け、一目で本の位置がわかるように工夫し、各学年の子どもたちの目線にあわせた図書の配置を心がけた。また、多くの子どもたちが図書室へ足を向けるよう、ぬいぐるみやマスコットを置き、明るく楽しい雰囲気づくりに努めるなど、環境整備にも力を入れている。

#### (2) 図書室の利用

全学級週1時間の「読書の時間」を設け、毎週図書室を利用できるようにした。図書室1では、1人1冊の図書を1週間借りることができ、図書室2では、児童への貸し出しは行わないが、調べ学習に必要なときは、必要な冊数だけ担任に貸し出すようにしている。このように、図書室は、児童がいつでも入室して、本を見たり読んだりするなかで、自然に本と親しめるような場所になるよう努めている。

#### (3) 図書室の運営・活動

##### ア 図書委員の活動

図書室の運営は、5・6年生の図書委員が中心に行い、掃除、本の整理整頓、休み時間の貸し出し返却業務、本の修理、新刊本の登録業務、低学年の世話等の活動を常時している。

##### イ ふれあいフレンド（図書館補助員）の活動

ふれあいフレンドの活動は、子どもたちが、本とのよい出会いを演出するきっかけとして重要である。ふれあいフレンドは、学級の「読書の時間」には、読み聞かせやブックトークを担当し、貸し出しの相談にも関わっている。図書室1では、蔵書に関する図書室クイズを実施し、正解がたまるとマスコットやブックカバーで作った下敷きなどがもらえるので、子どもたちには



ミニお話し会

大好評であった。図書室2では、火・木曜日の昼休みに、ミニお話し会を開催した。この催しは、子どもたちが廊下側の窓から身を乗り出して聞くくらい大盛況となり、児童の足を図書室に向けさせ、本に興味をもたせ、親しませるために大きな効果があったと考えている。特に、低学年のときから知らず知らずのうちに本に接し、親しむことがで

きる環境をつくることができた功績は大きい。

#### ウ その他の活動

1年に1回、読書週間にあわせて、町のお話し会『リスピー』の方々による「お話し配達」の催しを実施している。各学年の発達段階にあわせ、1時間たっぷりお話しを聞かせてもらえるので、本への興味や関心を高めるのに効果が上がったと思われる、これからもこの催しを続けていきたい。

#### (4) 読書活動の啓発

図書室だより『すずかけ』を月1回ずつ2種類発行している。子ども用『すずかけ』には、図書室の使い方、「おすすめの本」や今月の目標などを掲載し、各学級でこれをもとに図書室利用指導を行ってもらい、子どもたちの読書に対する興味・関心を高めようとしている。また、大人用『すずかけ』は、附属幼稚園・小学校の保護者に配布し、本のおもしろさや楽しさ、おすすめの本、読み聞かせの効果や大切さなどを紹介し、幼稚園の小さい頃から本に興味をもってもらえるように保護者に呼びかけている。さらに、壁新聞『図書室新聞』は、委員会の子どもたちが、子どもの目からみた本の楽しさ、おもしろさ、委員会からのお願いなどを全校児童にわかってもらおうと、月1回発行して子どもたちの目につきやすい所に掲示している。

館内では、おすすめ本紹介コーナーを設置し、先生方のおすすめ本のコメントを掲示したり、子どもたちのおすすめや感想カードを紹介した。先生のおすすめ本は、いつも貸し出し中で、図書室に見あたらないほどの人気を集めている。



図書室新聞

## 2 成果と課題

本好きな子どもたちを育てようと取り組んだ図書室の利用活動は大きな成果をあげ、子どもたちは知らず知らずのうちに多くの本と出会い、読書量はどの学年も確実に増えてきた。読書の量がそのまま読書の深さにつながると考えるのは早計ではあるが、本との出会いが、着実に本好きの子どもを育てるきっかけになると確信している。また、自分にあった本を自分自身で選ぶ力も身に付いてきたことも大きな成果といえる。しかし、感想文を苦手としている子どもたちもまだまだ多く、苦手意識の克服のためにも、より深い読書ができるように読書指導を続けていかなければならないほか、図書室と各教科の授業とのつながりをこれまで以上に深めていけるような指導に取り組みたい。

『本は心の栄養剤、4度目の食事ともいえる。自分の読みたい本を上手に読んで、心の栄養にしよう。』これは、私がいつも子どもたちに言っている言葉である。今後とも、読書活動推進を通じて、本の楽しさやおもしろさを伝え、心豊かな子どもたちを育成する取組を進めていきたいと考えている。現在、拠点校指導教員として、新採用の先生方と接しているが、若い人たちに図書館教育のよさ、素晴らしさを伝え、受け継いでいってほしいと考えている。

## 3 その他参考となる事項

参考文献 月刊「学校図書館」N0.616(全国学校図書館評議会発行)  
月刊「国語教育」(明治図書発行)



## 校務分掌(教務)からの情報発信について

高取町立高取中学校 富田 英明

### 1 実践内容

平成14年度より教務主任となり3年目を迎える。この間「学校週5日制の完全実施」「選択教科の履修幅の拡大・総合的な学習の時間の創設」等による『授業時数確保の問題』、「相対評価から絶対評価への移行」による『新評価の確立』、またそれに伴う成績処理作業の問題など様々な課題があった。



提起されている改革の必要性や趣旨は、教育理念として校長から説明があったが、その具現化のためには教員の共通認識と組織的な機能の構築が必要であると考えた。

そこで、教務主任として、校長から学校教育目標の具現化に向けた具体的構想を聞く中で、個々の教職員に対して資料の提供や具体的な提案が必要であると考えた。改革に向けての原案を提示するということはもちろんであるが、経験年数・価値観・発想などに相違がある教員に、まずは、「現状を伝えること」、そして、一步進んだ「具体の目標に向かっての共通認識を得ること」に力を入れた。(一人の百歩より、百人の一步を目指して！)

様々な改革を行う上で、最も影響を受けたのが授業時数であった。そのことはある程度予想していたが、実際どれほど授業時数が減少しているのかは、漠然とした状態しか把握できていなかった。例えば、学校行事を優先することにより、計画していた授業時数が確保できないといったこともあり、それらの現状を認識できるように「週間時間割表」を作成し、全教員に配布することにより、週及び月当たりの授業時数を常に意識してもらうような手だてを講じた。このような取組の中で、現状では標準授業時数を満たしていない場合があること、教科による不均衡(ばらつき)があること、行事の指導に時間がかかり過ぎていること等の課題が明確になってきた。そこで、これらの課題に対して、行事の精選、週授業時間数の調整、定期テスト最終日の授業実施、自習時間を出さない計画的な時間割の調整などの解決策を打ち出し、それらに取り組むことにより、結果として『授業時数の確保』ができた。

『新評価の確立』についても、なぜ今、新しい評価が必要なのかということについて、全員の共通理解を得るため、評価に関する先進校の資料や検討している現況等を教員に向けてこまめに情報発信を行った。また、『新評価の確立』に向けて、1年目(平成14年度)立ち上げ、2年目(平成15年度)改訂・見直し、3年目(平成16年度)完全実施とする3年間の計画と、それぞれの年次の具体目標を立てた。さらに、生徒にとっては、今後の学習に生きるような評価、そして教師自らも納得のいく評価を確立するために職員研修を企画・運営していくことに腐心した。

同時に、学校教育目標を達成するために各教科で『育てたい生徒像』を明確にし、目標に準拠した評価(絶対評価)をどのように推し進めるかはもちろんのこと、指導と評価を一体化した指導計画表の作成や単元ごとの具体の評価規準の作成、判断基準や評価



の補正等、絶対評価を推し進める中で、とにかく時間がかかることが明らかになってきた。

そこで、新たに成績算出及び通知票転記システムを作成し、通知票への転記等の事務作業にかかる時間の省力化を図ることで、少しでも一人一人の生徒に接する時間の確保に努めた。また、教師が自己評価(反省)できるように集計システム等を作成し、評価に改良を加えながら、教師自身も納得し、自信をもって生徒・保護者に渡せる評価を作成するように情報発信を行った。この他、様々な課題に対しても、職場全体の協力のもと取り組んだ。

今年度は進路指導主事を兼任する中で、これまでの2年間以上に学校内の動きを多面的に見ることができたと感じる。その中で、これまでの取組の不十分さにも気づき、進路指導の側面からも評価を見直す必要性を感じ、取組を始めている。

## 2 成果及び課題

これまでの『現状把握 課題設定 課題解決に向けての具体策の立案 実施』という取組を通して、職場に「誰かが方向を決めてくれる。」といった受動的な考え方から、「自らも考え実行していかなければ」といった気運が少しは出てきたように感じる。特に、本校のような小規模校においては、与えられた校務分掌だけではなく、誰もがどんな問題にもかかわっていくということが必要不可欠であるので、そういった点で成果があったと考える。

しかし、このような取組は今始まったばかりであり、一つの通過点であると同時に、『さらなる推進』という点でステップアップしていかなければならないと考える。

評価についても、2年間実施した中で見えてきた学校教育目標に準拠した評価規準の設定、それを具体化した各教科の評価規準の作成等には不十分さがあり、さらなる見直しが必要であると考え。また、学校の説明責任を果たす上で、生徒・保護者に対して、新評価の趣旨を十分伝え切れていないので、さらなる努力と研鑽が必要であると考え。

さらに、授業時数確保という目標のもとで実践してきた諸活動が、生徒・教師ともに「ゆとり」のない状態を生んでいるのではないかという危惧もある。こうした課題に対して、これからも教職員の共通理解のもと、より良い方向にむけて考え、取り組んでいこうと思う。すなわち、「例年と同じ」ではなく「常に外に目を向け、内を見つめること」で、今、何が必要なのかを考え、模索しながらやっていくことである。そして、課題を明確にしながら、教職員の共通理解を図るために、いかに情報発信をしていくかを、今後の課題としていこうと思う。

## 3 その他参考となる事項

高取町立高取中学校 e-mail torityu@gaea.ocn.ne.jp

子ども・地域に寄り添った教育の実現を目指して

明日香村立聖徳中学校 植田 栄子

1 実践内容

(1) 「目標に準拠した評価」の実践

本校では、「目標に準拠した評価」と「総合的な学習の時間」の準備委員会として教育課程検討委員会（校長・教頭・教務主任・各学年代表計6名）を平成13年度に発足させ、先進校の視察、資料収集等をはじめとする基礎づくりを行った。教育課程検討委員会で作成した原案は、職員の意見を取り入れながら何度も修正を加えては職員会議で議論を重ねた。この繰り返しの中で職員の共通理解が図られ、目標に準拠した評価を平成14年度から導入した。その取組の一部を紹介する。各教科部会で次の項目について検討することを通して、職員間の理解を深めた。



ア 学習指導要領の目標に沿った評価規準

(ア) 目標に準拠した評価をするための判定基準（各学期ごとに作成、指導要録評定のための基準についても年度末に作成）

(イ) 目標に準拠した評価をするための授業の工夫

イ 通知票については、観点ごとの評価（A、B、Cによる評定）と、これらを総括した10段階による評定の双方を記載することとした。

目標に準拠した評価の導入により評価にかかわる資料の整理等にかかる事務処理時間を軽減するために、学校で成績処理のソフトを全員で協力して開発した。職員の共通理解の中でスタートしたからこそ、このような協力体制も生まれたのだと思う。

また、この評価の導入によって、今まで以上に1時間1時間の授業の中で生徒個々の姿をしっかりとみようと意識が教師の中に高まった。さらに、生徒にとっても、努力の結果が目に見える評価として表れることは大きな励みになっている。ただ、毎年総括において課題としてあげられるのは、観点「 への関心・意欲・態度」についてどのような場面で、どのような方法で評価していくかということであり、職員研修を積んではいるものの難しい課題である。

(2) 「総合的な学習の時間」の実践

「総合的な学習の時間」の実践についても、教育課程検討委員会で準備を進めた。

明日香の地に根付いて生きる子どもの力を育てる時間として、本校における「総合的な学習の時間」を位置付けることから話し合いを始めた。この新しい教育内容が、単なる体験学習や調査学習で終わってしまうことのないように、本校独自の取組を創り出すのは大変だった。学校だけではなく地域の協力を得る中で、明日香の子どもが学び育つ学習にしたいと考えた。『明日香学』と名付けられた「総合的な学習の時間」は毎週木曜日の午後2時間が当てられ、年間70時間を目標に授業時間を確保する計画を立てた。また、毎時間の取組を生徒にきちんと振り返ることのできるものになりたいと考え、学習の記録方法を工夫した冊子『明日香学』が手づくりでできあがった。

『明日香学』成功の鍵は、地域の協力にあると考え、地域に協力を依頼した。1年

目の協力者は21個人、7団体におよび、その後も毎年、協力者の数は増えつつあり、聖徳中学校の生徒を育ててあげたいと願う、地域の方々の優しい心遣いと温かい励ましは、次世代の明日香村を担う子どもの心の糧になっていると実感する。教科学習がおろそかになりはしないかと危惧する意見など、様々な意見を乗り越えて、たどり着いた本校の「総合的な学習の時間」は、ようやく根を下ろしつつある。



『明日香学』校内発表会

郷土明日香を見つめ、自分の生き方を探す学習として始まった『明日香学』は、地域の方々に見守られながら着実に歩んでいる。

今年度は、1年生から『明日香学』を始めた生徒が3年生となり、その成果が問われる年であるとともに、教師の力量と学校の教育力が問い直される年といえる。

### (3) 「少人数指導」の実践

より確かな学力を保障するために、平成13年度から数学科において少人数指導が始まり、授業計画をはじめ、指導内容や評価の工夫といった面で、教師としての資質をより高める機会となった。毎時間が不安の連続ではあったが、授業の中で生徒が達成感や満足感を映し出す目の輝きは、私たち教員を励まし成長させてくれた。特に、習熟度別授業の少人数指導については賛否両論あったものの、この4年間で、生徒の学習意識の高揚と学力向上を確認することができた。しかし、新たに見えてきた課題もあり、今後も日々の改善が必要であると感じている。



習熟度別少人数指導風景

## 2 成果及び課題

これら3つの実践が本校の教育として根を下ろし、そのスタイルを確立させつつあるのは、校長の教育への情熱と、それを受けて日々実践してきた教職員の共通理解と協力体制、そして地域の方々の教育への温かい支援の賜と実感している。一村一小一中という環境で育った明日香の子どもが、変化の流れの速い社会の中で自分を見失うことも昨今は多くなってきた。しかし、地域の教育力という堅固な基盤の上にこの取組が進められていくことで、明日香の子どもに自分を見つめ、自分で考え、自分の生き方を選択する力が育つように思う。地域に根ざした学校として、子どもの教育に携わっていく使命を改めて感じ、今後も研鑽を重ねていきたいと思う。

## 3 その他参考となる事項

明日香村立聖徳中学校のホームページは平成17年度開設予定

## 学校教育目標を具現化するための教育活動について

十津川村立上野地中学校 前木 伸一

### 1 実践内容

#### (1) 十津川村立上野地中学校の教育目標

- ・ 自ら考え、判断し、意欲的に学習する生徒の育成
- ・ お互いに認め合い、支え合う心豊かな生徒の育成
- ・ 健康で、たくましい体力を持った生徒の育成



#### (2) 教師として大切にしていること

- ア 使命感や責任を自覚し、広い視野に立ったリーダーとしての力量の向上や専門職としての指導力を深化すること。
- イ 生徒を引きつける魅力ある人間性を持つこと。
- ウ 自らが学習や探求することに喜びや楽しさを感じる。
- エ 研究と修養に努め、変化の激しい社会に柔軟に対応できる資質を身につけること。
- オ 生徒が着実に成長し生き生きと生活できる学校、保護者・地域に親しみと信頼を与える学校づくりを、全職員と協力しながら目指すこと。

#### (3) 具体的な取組

##### ア 『自ら考え、判断し、意欲的に学習する生徒の育成』

##### (ア) 基礎学習の時間

週4日(火～金)、朝の15分間を使い、漢字と英単語の練習とテストを実施し、知識力を高めながら暗記力や集中力を養う。



基礎学習の様子

##### (イ) 魅力ある授業の構築

生徒が主体的・意欲的に取り組むために、生徒の生活や地域に結びついた教材の発掘及び活用を行い、教師主導の授業に偏ることなく、調べ学習や作業学習等の有効活用を図る。また、プレゼンテーションを利用したり、動画・写真・教科書・資料集の作品を有効活用し、わかりやすさと楽しさを追求する。

##### (ウ) 学校開放ウィーク

開かれた学校づくりをめざして設定している。学期に1回、一週間にわたり、学校のすべての教育活動を開放し、地域からの理解と信頼につなげている。授業では、保護者や地域住民も参加し、生徒と意見交流を行う場面や、地域の高齢者をゲストティーチャーとして招聘し、体験談等を話していただく場面などを設定し、授業内容の深化を図っている。さらに、校区の小学校の保護者や教師が参加することにより小・中学校の連携にも役立っている。

##### イ 『お互いに認め合い、支え合う心豊かな生徒の育成』

##### (ア) 人権講話

毎月11日に近い全校集会において、すべての教師が1年間に1回は、人権講話を行い、教員の人権意識を高めることに取り組んでいる。また、生徒たちには、



その講話の感想文を書かせ、その感想文を学級通信に掲載し、他の生徒たちの意見や感想を知ることにより、さらに考えを深化させることに役立てるようにしている。

(イ) 職場体験学習

仕事の意義・重要性などを、地域で行う職場体験学習を通して、生徒たちに考えさせ、今後の進路や生き方につなげていく。

(ウ) 全校スピーチ

月に1度全校生が集まる時間を設定し、1年間ですべての生徒と教師(1回4名程度)がスピーチを行い、自己表現力を高めさせる。

ウ 『健康で、たくましい体力を持った生徒の育成』

(ア) 基礎体力の時間

基礎学習と共に4年前から始めた。  
週3日(火・木・金)、放課後の20分間を使い、ランニング・柔軟体操等を全校生徒で行う。



運動会(体力づくりの成果を発揮する生徒)

(イ) 部活動の充実

十津川村の村技ともいわれる剣道を通し、心身ともに健康な生徒を育成するため、練習や対外試合等に積極的に参加し、活動させている。

## 2 成果及び課題

学校教育目標の具現化には、自分に与えられた校務分掌はもちろん、あらゆる教育活動に主体的に取り組む必要がある。また、全教職員と協力し、共通理解を図りながら組織として臨むことが不可欠である。さらに、へき地の特性上、地域を生活圏とする教職員がほとんどであるので、同じ地域に住む人間として、学校教育に限らず、社会教育にも貢献し、実践を重ねることも大切であるとする。そのことが生徒の知・徳・体の向上や、地域からの信頼につながっていくと思う。

課題としては、限られた時間の中で、いかに効果的に生徒に力をつけさせるか。生徒数の減少から生じる教育効果の低下をどう補うか。逆に、へき地や少人数の長所をどう生かしていくか。より積極的に地域を巻き込む教育をどのように行うか、などがあげられる。これらの課題に、生徒のため、地域のためにさらなる努力と創意工夫を重ねながら臨んでいきたい。

## 3 その他参考となる事項

十津川村立上野地中学校 e-mail uenoji-j@totsukawa-nara.ed.jp



生徒の心を育てる道德教育

室生村立室生中学校 若田 文子

1 実践内容

学校生活のあらゆる場において、「人間としてどんな生き方を目指すのか」ということを、生徒と共に考えていたいと思う。そして、「道德の時間」は、自分を見つめ、よりよく生きようとする新たな自分を築くための時間であると考え、道德の授業を次のような方法で取り組んできた。



(1) 生徒の興味・関心を生かした資料を選ぶ

生徒の身近で起きた出来事やタイムリーなものなどを題材にすることで生徒が興味を持って考えることができるようにする。

ア 「『いのち』を守るために」【中学校学習指導要領 第3章 道德 内容項目3-(2) 以下同じ】

室生村であった、崖にとり残された獺犬救出のニュースから、命の尊さを考える。(ビデオと新聞記事を使用)

イ 「コボちゃん」【2-(2)】

マンガの中の男の自分本位な態度から、相手を思いやる気持ちの大切さを考えさせる。(植田まさしの4コママンガを使用)

(2) 実在の人物にスポットを当て、生き方のモデルとなるような資料を活用する

人生の先輩としてすばらしく生きた(輝いて生きている)人物との出会いを通してその生き方に共感し、自分の生き方を考えさせることができるようにする。

ア 「山野忠彦 - 木の治療に魂をうちこんで」【3-(3)】



生きる目的が定まらず、放蕩を続けた末に夢を見出し樹医という仕事に半生をかけた山野さんの生き方を通して、夢や目標を持つことが人生を充実させるということを知り、自分の夢について考えさせる。(ビデオと自作資料を使用)

「山野忠彦」の授業の様子

イ 「新垣勉さんの生き方・オンリーワンの人生」【3-(3)】

様々な苦難や試練を抱えながら、すばらしい出会いを通して自らの人生を転換させ、まるごとの自分を受け入れることで個性を見出した新垣さんの生き方を通して、自分の良さや個性を見出そうとする意欲を持たせる。(ビデオと自作資料を使用)

(3) 授業の展開がいつも同じパターンにならないように工夫する

資料を読んで考え、友達の考えを聞き、自分を振り返る、という道德の授業の流れの中で、写真や場面絵・音楽・オープンエンドの資料などを使って工夫する。

ア 「命の行方 - あなたはどう考える?」【3-(2)】

混血ザルを「安楽死」させることの是非を議論することで、生命の尊重について多面的にとらえ、人間と動物の共存の在り方も考えさせる。(新聞記事を使用)

イ 「ぼくには言えない」【2-(3)】

友達の万引きを目撃した主人公のとるべき態度を通して友情について考えさせ、どうすることが真の友情であるのかを話し合いを通して考えさせる。(モラルジレンマ

の資料を使用)

(4) 行事や体験学習などと関連づける

行事や総合的な学習の時間での体験学習の前後に関連のある道徳の授業を入れることで、生徒が意欲を持って取り組めたり、個々の体験から共通の価値を認識したりすることができるようにしている。

ア 「加山さんの願い」【4-(5)】

自分にできることで社会に貢献しようとしている加山さんの思いに触れさせ、社会の一員としてボランティア活動に取り組んでいこうとする意欲を高めるためにボランティア体験前に行く。(道徳教育推進指導資料集を使用)

イ 「山奥の請け負い配達夫さん」【4-(5)】

郵便局の請け負い配達という仕事を30年間続けてきた渡辺さんの仕事に対する責任感を理解させると共に、その仕事を続けてこられた裏にある喜びを知り、勤労の尊さを理解させるために、職場体験の後に行く。(副読本を使用)

(5) 学級通信に生徒の声を掲載する

道徳の時間の中で出た意見や感想を保護者に知らせ、生徒の心の成長を共有することができるようにする。

(6) 道徳の時間の中での評価を生かした指導を工夫する

生徒たちの道徳的な心情を揺さぶり、確かな判断力をつけるために、より深くその時間のねらいに迫るような効果的な発問ができるように工夫する。

## 2 成果及び課題

卒業を間近にひかえた生徒たちに、三年間の道徳の授業を振り返っての感想や意見を聞いてみると、ほとんどの生徒が「道徳(の時間)は大事だ」と答えていた。そして、道徳の授業は、「自分自身について考えたり見つめたりする時間。人間らしい気持ちを学ぶ時間。いろいろな人の体験談や人生観を知って自分なりに考える時間。」だととらえていた。拙い授業ではあっても、三年間積み重ねたことで道徳的な心情や判断力の確かな芽が育ってきているのではないかと思う。「道徳は大切だ。でも、授業をしたからといって生徒はなかなか変わらない……」という声を時々耳にする。確かに人間の行動は一朝一夕に変わるものではない。しかし、道徳の授業を積み重ねることで、生徒たちの心に「どう生きるのか」を考える種を蒔き続けたいと思う。心の引き出しにたくさんの種が蒔かれていれば、生徒たちは将来人生のいろんな場面で、自らの奥にある引き出しを必要に応じて開けるだろう。道徳的実践力はその時発揮されると信じたい。

「道徳」に取り組むようになって、教師としての自分が変わったなと思うことがいくつかある。その一つに、私自身が生徒の今のあるがままの姿を心の発達段階の一つの過程だととらえるようになったことがある。焦らず、諦めず、見守っていくと生徒は必ず変容していく。誰もがよりよくなりたいという願いを持っているからである。教師の仕事は生徒が次の段階にステップするための支援をすることだと思う。生徒たちの前向きな気持ちを行動に表せるきっかけとなるような道徳の授業、そして学校生活のあらゆる場面での効果的な言葉かけを今後さらに模索していきたい。

## 3 その他の参考資料

参考文献 道徳教育推進指導資料4(文部科学省)

荒木紀幸著「モラルジレンマ資料と授業展開・中学校編」(明治図書)

副読本「明日をひらく1」(東京書籍)

## 弱視学級生徒の指導実践について

平群町立平群中学校 木村 学

### 1 実践内容

平成16年度より本校に入学したA君は、弱視学級に入級しているが、全盲である。前年度よりA君を迎えるための様々な準備、取組を行ってきたが、その大きな流れは、次のようなものである。



6月 両親が来校され、本校への進学希望の旨を伝えられた。

8月 平群北小学校を訪問し、A君の元担任からA君の日常の様子を聞く。

10月 三郷小学校B教諭（元緑ヶ丘中学校弱視学級担任）に実践を聞きに行き、準備段階での留意点を教えていただく。また、平群北小学校に点字専用機器についての打ち合わせに行く。

11月 県立盲学校に教育相談、平群北小学校に授業参観に行く。

12月 大東市立諸福中学校へ先進校見学、県教育研究所に就学に関する法律の相談に行く。平群町就学指導委員会で正式にA君の本校への入学が決定。

1月 大阪のライトハウス（社会福祉法人・視覚障害者自立支援団体）の方と共に、施設の整備についての検討を行う。

2月 教職員全体での視覚障害教育に対する研修を行う。

3月 小学校との最終の引継ぎをする。その後、設備の設置工事に着工し、教科書等の整備、そして、A君自身の登下校の歩行訓練をライトハウスの方と行った。

A君の入学後は、まずA君のことを全校生徒に知ってもらうため、校長や生徒指導主任より、集会等いろいろな場面で話をしていただいた。また、クラスでは道徳の時間に、点字や手引きのことなどを説明し、実際に生徒たちが点字で自分の名前をシールに打ち、それを机に貼ることで理解を深めた。A君は、小学校よりの友だちも多く、休み時間もクラスの生徒といろいろな会話をしており、双子の弟が隣のクラスにいるということも、A君にとっては何より心強いこととなっている。

文化祭では、自ら舞台での楽器演奏を行ったり、体育大会では友人に手引きをもらって100メートル走を完走するなど、積極的に行事にのぞんでいる。クラブでは囲碁・将棋部に入部し、囲碁の視覚障害者の大会にも参加して、少しずつ級を上げている。



学習面では、現在、障害児学級担任とともに、交流学級で授業を受けていることが多い。どうしても、授業の進度

囲碁部での活動の様子

についていくことが難しいため、放課後などに時間をとり、復習の機会を確保している。

定期考査は基本的に同じ内容の問題であるが、点訳の不可能な問題に関しては、差替え問題を作っている。時間は基準の1.5倍の75分で行っている。

教科指導の方法については、月に二回ほど県立盲学校へ教育相談に通い、A君と共に教師もアドバイスを受けている。また、県立盲学校主催の行事などにも参加し、県立盲学校の生徒との交流を深めている。

## 2 成果および課題

成果としては、入学よりA君自身が、学校生活を楽しく送り、毎日元気に登校していることがまずあげられる。クラスのメンバーとも楽しく過ごしており、A君が困ったときには自然と手助けをしてくれている。

教師にとって最も心配していた毎日のプリントや副教材、テスト等の点訳も専門の先生に来ていただき、滞ることなく提供することができている。また、授業でのA君に対する援助も、担当教諭が点字の研修や教材研究を繰り返し、スムーズに行えるよう努めている。

反面、大きな課題が二つある。一つは生活の自立である。給食や着替え、トイレなどは一人で大丈夫だが、移動することはかなり難しい。登下校にバスを使っているが、そのバス停から昇降口まで距離があるため、当初は送り迎えをしていた。慣れてくるに従い、一人でできる練習を進めた結果、歩道を歩くことはかなりスムーズになってきたが、大きな道路を安全に渡れるようになるには、少し時間がかかるようである。校舎内での教室移動も一年以内に一人でいえるようになるという目標を立ててがんばっているが、立体の位置関係を把握することがたいへん困難である。

もう一つは進路である。教科学習は、他の生徒と同じ授業内容で行っているが、読み書きが点字のため、進度についていくことが、少し難しくなっている。放課後に学習時間をとっているが、まだまだ不十分である。

進学を希望しているので、十分な学力の定着のために、教科学習をどのような形で進めていくかを現在模索中である。

先日バス停からの登下校路の草引きをいっしょに行った。A君は思っていたより草が丈夫なことを感じたのか、「結構たいへんなんやなー」と言っていた。A君にとっては、草引きという新たな体験を通して、学んでくれたようである。私もA君をより理解していくために、このような経験を積み重ねながら、お互いが、少しずつ前進していけるよう、新鮮な毎日を送っていきたいと思う。



パーキンスを打つA君

## 3 その他参考となる事項

平群町立平群中学校 e-mail hgr-boe2 @ kcn.ne.jp



中学校における障害児学級の経営について

大淀町立大淀中学校 上村 明美

1 実践内容

障害児教育で大切なことは、何よりも生徒が楽しいと感じる授業、学級づくりをすることだと思っている。生徒が「わかった」「できるようになった」と実感でき、その時間が待ち遠しくなるような授業、明日もまた来たくなるような友だちや先生との関係をどのようにしてつくっていくかが、障害児学級担任としてもやりがいを感じる場所である。



本校では、生徒がスムーズに中学校生活に入れるように、就学指導委員会が開かれるまでに小学校と連絡をとり、入級対象児童がいる場合、その担任教師との連絡会、その後の保護者説明会（授業参観を含む）を持ち、中学校での学習・生活のあり方を理解してもらおうと同時に、小学校卒業後の進学先として本校が適当かどうかを考えていただく機会としている。本校の障害児学級に入級が確定した児童については、3学期に小学校に赴き、児童の小学校での様子を見学、担任との懇談を持たせていただいている。また、中学校への体験入学（保護者も見学、懇談）も実施している。

本校では、学年ごとに学級を編制し、毎日の終学活、学活、道徳をこの単位で行っている。教科の授業については、学年・種別によらず、生徒の発達段階に応じ教科を決め、1～3のグループに分けて学習を進めている。音楽・美術・体育・技術家庭は、教科の性質上全員が一つのグループで学習している。授業は障害児学級担任が担当するが、音楽・美術・体育・技術家庭については、各教科担当を中心に障害児学級担任も入り進めている。形態は、グループの実態に応じ、1人で担当するものと、2～5人のT・T・で行っているものがある。総合的な学習の時間については、障害児学級担任全員で担当している。

<本年度の授業教科とグループ>

教科	時間数/週	グループA	グループB	グループC	備考
国語	5	4(2)	2(1)	2(1)	
社会	2	3(2)	2(1)	3(1)	ⅡA・ⅡB全級②
数学	5	4(2)	4(1)		
理科	2	3(2)	3(2)	2(1)	ⅡA・ⅡB全級①
英語	2	3(2)	2(1)	3(1)	ⅡA・ⅡB全級②
音楽	1		全8(①+③)		同じ科目に特別学級の授業もあける。
美術	3		全8(②+③)		
体育	2		全8(②+①)		ⅡA・ⅡB全級①
技術家庭	3		全8(②+③)		Ⅰ・Ⅱの両半は特別級
総合	1		全8(⑤)		ⅡA・ⅡB全級⑤

このような形で運営していく上で必要なことは、教師集団の共通理解と役割分担である。授業や行事、各学級・生徒の様子についての情報交換のために打ち合わせを重視し、常に生徒や授業のことが話題に上るようにしている。年度当初に組んだ学習グループが適当でなかった場合、再編することもある。

日々の実践の中では、見通しを持たせつつ、生徒たちがわかりやすく楽しんで授業に取り組めるように教材や授業の方法を考えるようにしている。体験的な学習や、経験の



幅を広げることを目的とした他校の障害児学級との交流も組み込んでいる。総合的な学習の時間には、昨年度から地域の方をゲストティーチャーとして迎え、生徒が教師以外の人から教わる機会を持つと同時に、地域の方に生徒たちに対する理解を広げていく機会ともしている。

学習発表の場として、文化祭では、夏休みを利用して普段の授業では取り組めない大掛かりな作品を全員でつくり、展示発表を行った。日頃の学習のまとめは、休日参観に保護者の前で発表したり、町や郡のなかよし学級会（障害児学級入級児童・生徒の会）の折に、活動の発表や劇の上演を通して見ていただいている。

評価については、『各学期の記録』と、教師が出す教科ごとの記述式の評価（『通知票』）により行っている。それらを基に保護者と懇談し、それ以後の指導のあり方を検討する大事な機会としている。また、生徒自身に学習、生活、自分自身や友だちのことについて振り返らせ、それに保護者・担任の意見も加えながら、学級全体として学期を振り返り、確認し合うことで、よりよい次の学期をつくっていくための時間もついている。

このような学校での取組をより確かで効果的なものにしていくために、保護者との関係はたいへん重要であると考え。よりよい関係をつくるために、1時間ごとの教科の学習内容・生徒の様子を担当と家庭双方からの連絡等を記す連絡帳に記載し、毎日やり取りするとともに、障害児学級全体の“今”の様子を伝える学級通信の発行を軸に、必要に応じ電話連絡や家庭訪問を行っている。夏休みには、家族や卒業生も参加するバーベキュー大会も行っている。自分の子どものことと共にいっしょに学習している生徒の様子も保護者に知ってもらい、生徒の成長のための環境づくりに機会があるごとに様々な形で理解と協力をいただいている。

## 2 成果及び課題

教師が共通理解の上に立って授業を行っていくことで、多方面からの多様な取組が可能となる。時間により、グループ、担当教師、教室が変わることに最初はとまどいも見られるが、個々の生徒の課題に合った授業が組み立てやすく、しかも集団であるので、生徒相互の刺激もあり、生徒の学習意欲が高まり、そのことが、わかる喜びや、自分に対する自信につながり、個人の力を伸ばす上で大きな力となっている。その中で学習能力だけでなく、人間関係の作り方や、自分で考える力も身につけていくように思う。これは、自分と向き合い、悩み、自分らしさを見つけ、自立していく力を鍛えることにもなり、思春期の中にある彼らにとってとても大切なことである。

一方、課題であるが、音楽（一部生徒は体育も）以外はすべて障害児学級での授業となるため、健常児と過ごす時間が少ない。知的発達遅滞を伴っている場合、学校の中で健常児とどのような交流をつくっていくことができるのかが課題である。また、障害児学級担任が変わることの多い中で、教師の力量を高める研修の持ち方も考えていかなければならないことである。

## 3 その他参考となる事項

特になし

## 子どもたちが、生涯にわたって健康に生きるための支援活動

檀原市立八木中学校 大杉 好

### 1 実践内容

養護教諭は、日頃から健康問題に直面し、保健室を中心に子どもの心身の健康を守り、育てることを職務とし、その問題解決のため専門的立場に立った実践を行う教育職員である。

私は、養護教諭の研究団体である、奈良県養護教育研究会の一員として、子どもたちの心身の健やかな発育・発達を願い、健康管理・健康教育を担当する一方、ヘルスプロモーションの理念に基づいた学校保健活動の推進に日々努力している。

近年の社会環境・生活様式の急激な変化は、子どもたちの心身の健康に大きな影響を与え、いじめや不登校などの心の健康、喫煙・飲酒・薬物乱用・性の逸脱行動・生活習慣病の低年齢での出現・感染症の発生など、新たな問題を生じさせている。これらの課題に適切に対応するためには、家庭や地域社会との連携を図りながら、学校教育活動全体を通して、ヘルスプロモーションの理念を生かした学校健康教育を推進していく必要がある。このような状況の中で、複雑化・多様化した現代的課題の解決にむけ、養護教諭の役割には、一層期待が高まっている。

さらに、養護教諭は学校の中では唯一医学的素養をもって、子どもへの教育活動に携わる職種である。時代の流れとともに養護教諭の役割の重要性が認められ、養護教諭自身も健康教育実践者としての誇りを持ち始めている。

奈良県養護教育研究会は、県内の幼稚園・小・中学校の養護教諭で構成されており、昨年は多くの先輩諸氏を迎え50周年記念大会を開催し、その時々々の健康課題に対応してきた歴史に触れると共に、新たな課題解決の方途について研修を深めた。

平成14年度には近畿養護教諭研究協議会を奈良県で開催し、近畿の養護教諭が一堂に集まり、その職務について研究協議を行い、学校保健の充実・推進を図った。平成17年度には全国養護教諭研究大会の奈良県開催が決まり、研究大会の成功にむけて関連機関との連携を図っている。

活動としては、年1回の研究大会と研修会を開催している。具体的には、

- (1) 保健室の機能を生かした健康相談活動の進め方
- (2) 養護教諭の専門性を生かした子どもたちの健康課題への対応の在り方
- (3) 養護教諭の保健教育への具体的な参画や支援の在り方
- (4) 現代的健康課題に対応した保健管理の進め方
- (5) 学校で行う救急処置



研究大会の様子

などのテーマを取り上げ、県内17ブロックの中から小学校2班と中学校1班の研究発表や実践発表を実施し、全体研修や班別研究協議会を通して、力量を高めている。研究冊子「こじか」は、今年で51冊目を発刊する。

さらに、養護教諭の専門性を生かした保健指導・保健学習に絞った研修会を開催し、教育研究所の指導を仰ぎながら、指導書の作成・模擬授業・研究推進校への学校訪問・講師を招いた研修を重ねている。



研究冊子「こじか」

## 2 成果と課題

養護教諭の職務は、「養護をつかさどる」と学校教育法に規定されている。私自身この職務に就いて30年が経過したが、学校の様々な教育活動に協力したり、疾病異常のある子どもに個別に看護援助したり、集団の保健管理をしたりする時代から、子どもの健康増進のために集団を対象にした保健教育活動を行うなど、時代の変化に対応してきた。さらに、健康教育の概念の変化により、働きかける対象が子どもだけでなく学校という組織や家庭・地域と広がってきた。また、子どもの心と体の危機が話題にあがるにつれ養護教諭や保健室への期待が大きくなってきた。保健室で個別に子どもや保護者の相談に応じていたが、問題の解決には組織的な対応が不可欠になってきており、人や組織間での調整が次第に重要になってきている。

なかでも、子どもの成長を願って学校全体に働きかけたことがひとつの契機となり、養護教諭による健康教育を推進し、子どもが変容しただけでなく養護教諭自身が成長できたこと、教職員全体がまとまり子どもたちのために進んで取り組む雰囲気が出たこと、それらの個々の成長が強く影響して学校組織全体が大きく成長してきたことを実感した。

このような経験から、学校教育が大きな変換期にある今だからこそ、養護教諭が持ち合わせているネットワークをフルに活用し、今までに獲得してきた実践力を基に、保護者からの相談へのきめ細やかな対応をはじめ、地域や関係機関との連携による学校健康教育の推進を図る必要がある。

奈良県養護教育研究会は、養護教諭として、生きる力を育みながら生涯にわたる健康づくりへの支援と課題解決のための対応や、着実な活動を展開しながら回を重ね、養護教諭の職務について研究し、養護教諭の資質向上と学校保健の向上を目指している。どんな変化の時代であろうと、子どもたちに寄り添う養護教諭として、明るい笑顔で日々の教育実践を心がけていきたい。

## 3 その他参考となる事項

特になし

## 中学校における吹奏楽部の指導について

生駒市立生駒中学校 牧野 耕也

### 1 実践内容

生駒中学校吹奏楽部は、昭和42年の創部以来、37年という県内でも有数の歴史のある吹奏楽部である。私がこのクラブの顧問になった平成3年の部員数は、1年生から3年生まで合わせて約50名で、部員の数としては十分な人数であったが、計画的、体系的な練習が行われておらず、演奏のレベルは高いとはいえなかった。年間の演奏回数も県のコンクールや市の音楽会、校内の文化祭等5～6回程度であり、自分たちの演奏を聴いてもらえる機会もそれほど多くはなかった。



私がモットーとしてきたのは、「聴く人を感動させる音楽をつくりあげていくこと。」である。音楽は演奏する側と聴く側の両者があって初めて成立するものであり、演奏する側は聴く側を十分に満足させ楽しませる責任を負っていると思う。もちろん中学生の部活動であるので、プロの演奏家と同じことはできるはずもないが、中学生なりに聴く人を満足させ、楽しませることができると思う。私は、部員たちに「ステージに上がる以上はひとりのプレーヤーとして、聴く人を満足させる責任があること。」を常に意識させるように心がけてきた。このような意識が部員たちに浸透するには、数年間の時間を要したが、できるだけ演奏回数を増やしたり、自分たちで独自にコンサートを開いたりして、次第に意識を高め、練習に対しても自主的に取り組んでいく姿勢を芽生えさせてきた。

また、最初生徒たちは、他の中学校の演奏を「あんなことできてへん。」「あの音はずしてる。」などと、あら探しの聴き方をしていたが、「どんなバンドの演奏にも必ず自分たちにはない素晴らしいものがあるから、それをしっかり聴くこと。」を徹底させ、どの演奏からも必ず何かを学び取る気持ちを大切にするようにしてきた。学べることはすべて学び取っていくという姿勢が身に付いたからこそ、自分たちのスタイルを築き上げていくことができたのではないかと思う。私は音楽の教師ではないので、専門的なことはプロの先生方をお願いして指導していただくことも多いが、こういうときでも部員たちがその指導を吸収しようという姿勢がなければどんな素晴らしい指導も無駄に終わってしまう。部活動の顧問として一番大切なことは、音楽の指導以前にいかにして部員たちのやる気を高め、貪欲に何でも吸収しようとする気持ちを持たせるかではないかと考える。

もちろん、教育委員会をはじめ、学校、地域、保護者ならびに多くの吹奏楽関係者の協力がなければここまでやることはできなかつたし、それらの協力に対して、感謝の気持ちを部員たちに持ち続けてほしいと思う。そして、吹奏楽を通して経験したことを生かして生徒一人一人が人間として成長し、今後もいろんな形で音楽にかかわってほしいと思っている。



## 2 成果及び課題

- 平成 3年 4月 生駒中学校に着任、吹奏楽部顧問  
平成 6年 7月 第 1 回定期演奏会を開催  
8月 奈良県吹奏楽コンクールで初の金賞受賞  
平成 7年 8月 奈良県代表として初めて関西吹奏楽コンクールに出場し銀賞受賞  
平成 8年 8月 奈良県吹奏楽コンクール金賞受賞  
平成 9年 8月 関西吹奏楽コンクールで初の金賞受賞  
平成10年10月 全国大会出場を記念してオータムコンサートを開催  
平成10年10月 平成11年11月、平成12年 9月  
全日本吹奏楽コンクールに3年連続出場・3年連続金賞受賞  
平成13年10月 3年連続全国大会出場を記念して特別演奏会を開催  
11月 吹奏楽コンクールの規定によりコンクールには参加せず  
群馬県で開催された国民文化祭に出場  
平成14年 9月 平成15年11月、平成16年 5月  
全日本吹奏楽コンクールに3年連続出場・2年連続金賞受賞  
平成16年11月 オータムコンサートが6回目を迎える

当初は言われたことさえなかなかできなかった部員たちであるが、さまざまな経験を経ていくうちに、練習はもちろん部員同士の人間関係までも自分たちで考え、問題点を見だし、そして解決していけるようになってきた。今では部員たちの考えにこちらが「なるほど」と思わされることも少なくない。

今年では連盟の規定により平成13年度に続いてコンクールに出場できない年となる。吹奏楽の活動においてコンクールがすべてではないが、生徒たちにとって大きな目標となるのは事実であり、そのような状況でいかに充実した、そして生徒たちが「やってよかった。」と思えるような活動を行っていくかが大事であると感じている。

最後に、ここまで吹奏楽部の活動を支えていただいた多くの皆様に改めて感謝申し上げます。



部員とともに

## 3 その他参考となる事項

生駒市立生駒中学校ホームページ <http://www.ed.city.ikoma.nara.jp/school/ikoma-j/>



女子ソフトボール部・全国優勝にいたるまで  
- 公立中学校における部活動のあり方 -

三郷町立三郷中学校 末永 一夫

1 実践内容

平成15年8月、北海道石狩市において開催された全国中学校ソフトボール大会で、三郷中学校女子ソフトボール部は、奈良県勢初の全国優勝を果たした。

私がソフトボールと出会ったのは、昭和59年平群中学校に新任教員として赴任した時であった。私は保健体育の教師ではあるが、ソフトボールは専門外でその奥深さに驚きの連続であった。また、当時の平群中学校の教員の平均年齢は20代後半であり、パワーが溢れていた。どの部も活気があり、部活動のさかんな中学校であったように思う。この11年間に、多くの部が県優勝を果たし、多い時には近畿総体に団体・個人を含め150名余り出場するといった状況であった。教師としてのスタートがそのような状況であったことから、同僚教師とよい意味で競い合い、認め合う日々を過ごし、常に話題は目の前にいる子どもたちや保護者のことであった。



そんな中、ソフトボール部を担当して3年目には、奈良県の強豪チームと肩を並べるまでにチームは成長し実力をつけていた。今振り返ると子どもたちのパワーと保護者の熱意に支えられた日々であったと思う。また、奈良県のみならず近畿の多くの熱い先輩教師との出会いが、今もなお、私の成長の源になっており、ソフトボールを通して、私の教師としての基礎が築かれたように思う。言いかえれば「教育と勝負の両立」に日々悩み、挑んできたということになるのであろう。

さて、三郷中学校に赴任して9年、教師になって20年がたち、教育を取り巻く環境はずいぶん変わった。部活動においても、20年前の手法が通用するわけではない。指導方法のみならず練習時間や活動日数のことや、生徒や保護者への対応など、時代の変化に合わせて自分なりにやり方も変えてきた。しかし、教師自身が情熱をもって日々子どもたちと向き合っていることの大切さは、今も昔も変わらないと確信している。

そんな中、遠い北海道の地で子どもたちが果たしてくれた「日本一」は格別のものであった。競技の特性上、運も必要である。また、打ったり、捕ったりするのは一人一人であるため、個々の心の強さも必要となる。試合に出ている者、出していない者、さらには応援の保護者や監督が一体になることが必要不可欠であると思う。そして、すべてがひとつになった時、夢は実現した。

今振り返ってみると、昨年の子どもたちが今まで出会った子どもたちと比べ、特に優れていたわけではない。また、「日本一」のタイトルだけに満足しているわけでもない。今まで20回の夏のドラマと感動すべてが私の財産となっている。そう思うと結果に関わらず、20年間に会ったすべての人たちに感謝せずにはいられない。メダルや賞状は色あせるが、私の心の中には一生残る感動が焼きつき、その感動がさらなる情熱を生み出す原動力になっている。「教師である前、監督である前に人である。」ことをモットー

に、自分自身の情熱を絶やさず、できるだけストレートに子どもたちと保護者に、自分の思いを今後もぶつけていこうと思っている。

## 2 成果と課題

戦績の主なものとして、次にそのいくつかをあげる。

県総合体育大会 10連覇中  
県秋季新人大会 優勝等入賞数々  
県春季選手権大会 優勝等入賞数々  
滋賀・和歌山・奈良三県大会  
優勝等入賞数々

近畿総合体育大会 優勝（2003） 準優勝（1999、2002） 3位（4回）

全国総合体育大会 優勝（2003北海道大会）

準優勝（2002滋賀大会） 出場（1999金沢大会）

### (1) 「教育と勝負の両立」

勝つことだけの部活動ではなく、活動の中に生徒指導的な面や学習意欲の向上など、教育的指導を数多く盛り込み、子どもたちの人間的な成長を目指して指導してきた。一方、スポーツである以上、子どもたちには、全力で練習に取り組みせるとともに不断の努力を積み、勝つことで得られるものを大切にさせてきた。

### (2) 「教師・監督である前に人であること」

学校の中でも、私生活でも、一人の人間として、謙虚な生き方をしていこうと努力すること。

### (3) 指導者としての資質の向上

自分自身が指導者として常に視野を広げ、県内外を問わず、分野を問わず、人との素晴らしい出会いを見逃さないように努めていきたい。

### (4) 学校教育の柱の1つに「部活動」を置き、全教師体制で取り組むこと

月1回の正・副部長会議の開催等。

### (5) いつも心がけていること

子どもたちと一緒にいる時間を最優先すること。

### (6) 保護者と密接な関係を築くこと

家での顔と学校での顔を変えないような子どもたちにすること。

## 3 その他参考となる事項

特になし



2003年全国中学校体育大会（北海道石狩市）

第25回全国中学校ソフトボール大会 優勝

## 部活動を通しての生徒の健全育成について

五條市立五條東中学校 片山 哲郎

### 1 実践内容

平成3年の4月、五條東中学校に着任したが、着任当初から、柔道部の指導に携わることができ、大変恵まれていた。ただ、武道場がなく練習場所の確保に苦労をした。幸いにも平成4年度～平成6年度にかけて文部省・奈良県・五條市の指定研究「武道指導(柔道)推進」を受けるとともに、多くの方々のご尽力により、平成7年度に武道場が完成するに至った。



それまでは、バレー部・卓球部・剣道部・柔道部と交互に体育館を利用するという不便さもあり、五条警察署の武道場をお借りするという時期もあったが、これをもって解消することができた。また、他の部活動顧問の先生方は、入部した生徒に対して、一から指導していかなければならないことが多いが、柔道部には地域にある熱心な指導者のいる町道場（五條五大館、牧野柔道会）の経験者が入部してくれるようになり、応用練習をはじめとする実践練習へ早期に取り組むことができた。また、武道場の完成によって、練習場所の確保、練習時間の充実により、各種大会（全国・近畿・県）に上位入賞できるなど、現在の本校柔道部の戦績につながったと思う。

特に、平成10年度の入学生が、小学校時代に全国レベルの大会で入賞するなど、メンバーが充実しており、「全国・近畿大会において上位を狙えるチーム」と感じた。この時期を境にして、指導方針に変化が表れるようになった。

指導方針については、下記の点に注意をしている。

#### (1) 生徒について

##### ア 平等な1日・24時間

自分たちに平等に与えられた24時間を、上手に活用しなさい。特に柔道にたとえるならば、人と同じことをしていても決して勝ち抜くことはできないのだから、与えられた練習のみではなく、学校での練習時間以外に練習の場をもちなさい。

##### イ まずは人の話を聴くこと

口は災いの元ということわざがある。話をする前にまずは人の話（助言）に耳を傾け、人の行動を見極めてから話（行動）をしなさい。

##### ウ 努力は人を裏切らない

一生懸命する人は決して裏切られない。試合の結果は、後からついてくるもの。

##### エ もう一人の自分に勝ちなさい

人は多くの葛藤と共に生きている。一つのことを達成するためには、耐えることも必要となる。それに打ち勝つことが達成することへの近道である。

##### オ 目標とされる人となれ

何をするにも人の多くは真似ることより始まる。やるからには、目標とされる人になりなさい。

力 実るほど頭を垂れる稲穂かな

成果を残した人ほど、知らず知らずに天狗となりがちである。成果を残せば残すほど頭を下げ謙虚になりなさい。

(2) 保護者について

保護者の理解・協力・支援なしには、活動することは大変困難である。常日頃から柔道部の保護者に対してはありがたく思っている。保護者との人間関係を保つためには、家庭訪問等により連絡を密にすることが大切である。

特に保護者は、部活動在籍中の結果はもちろん、生徒の進路に期待を寄せている。本校の場合は保護者会を年に3回程度実施しているが、その際に「柔道も大切ですが、勉強と生活面の指導も大切なので、家庭でもよろしくお願いします。」と話をする。《柔道さえ良ければ》ではなく、高校・大学あるいは就職と長い人生の中で、立派な社会人になるためには、勉強も大切であるということ、根気よくお願いしていきたい。

(3) 教師間について

「部活動中心教師」と言われぬように、学校での役割を大切に、職務を遂行していきたい。現在、生徒指導主任として、先生方とともに、柔道の精神を生かした生徒指導に取り組んでいる。具体的には、思春期における心の安定と成長を目標に置き、日常生活においても自己の存在感を自覚しながらどんなことにもくじけない強い心を育てるとともに、人を思いやることのできる人間形成や、「心・技・体」の精神をしっかりと受け止められる人づくりを目指して、学校の先生方とともに取り組んでいる。

(4) 地域について

地域の道場の先生方と、生徒についての情報交換をするとともに、柔道部の指導で培った経験をもとに、青少年センター・校区補導会・警察等関係機関との連携等、生徒の健全育成のための指導体制の構築に努めている。

(5) 家庭（家族）について

仕事とはいえ、自分の家族に多大の犠牲を強いていることは否めない。土・日・祝日等には、ほとんど家にいたことがないというのが現実である。家族との会話をできるだけ密にし、わたしの仕事をよく理解し協力してくれる家族に感謝している。

2 成果及び課題

本校柔道部は、県大会・近畿大会での団体男女アベック優勝や、全国大会入賞を果たすとともに、部員には、部活動のみならず学校生活全体において向上心・成就感や、目標達成のために努力する姿が随所に見られる。

礼節を重んじる柔道を通して、学校のみならず地域での生活を含めて、大きな声で朝のあいさつを交わす姿や、人の気持ちを受け止めて心くばりをする姿等、部員たちの姿勢が学校全体の生徒たちに広がりを見せている。

今後とも、こうした姿や広がりを大事にしながら、生徒一人一人が「おごり」や「たかぶり」を持つことなく、謙虚な姿勢でさらなる向上を目指せるよう私自身も努力をしてまいりたい。

3 その他参考となる事項 特になし

## 新学習指導要領に基づく教育課程編成の工夫について

奈良県立橿原高等学校 中川 喜次

### 1 実践内容

国・県をあげて教育改革・学校改革が進められる中、本校では校長の指示を受け以下のような取組を行った。

新高等学校学習指導要領では、自ら学び、自ら考える力を育成することや、ゆとりある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実することなどが基本的な方針として打ち出されている。このことを受けて、平成11年に私を含む数名のメンバーで教育課題研究班が設置された。そこでは、本校生の実態と実施中の教育活動とを総合的に分析し、本校教育の改革に向けて課題の整理を行った。



この中で、本校の生徒は素直で思いやりがあり規律正しいことや、生徒と保護者がともに進学を強く希望していることなどの実態が把握された。また、当時の全国的な大学改革の中で学部・学科の改組・改編が相継ぎ、そのことが生徒にとって上級学校を一段と見えにくくしていることなどが分かり、今まで以上に確固たる目的意識を持たせる進路指導と、学力のさらなる向上を目指す教科指導が課題として捉えられた。

このことから、「自己理解から自己実現へ」を本校の課題を解決する基本的な視点とした。これに基づき、平成13年度には授業時間の見直しを図り、65分授業の試行を行った後、その実施結果や生徒のアンケート調査等を踏まえて、平成14年度から正式に65分授業へ移行した。これにより週32単位分の授業時間を無理なく確保することができた。

次に、3年次では個性の伸長や多様な進路の実現を図るために、文型では12科目から10単位を、理型では11科目から12単位を生徒が自由に選択できる教育課程を編成した。加えて、確固たる目的意識を育てるため、平成15年度から実施される「総合的な学習の時間」においてキャリア教育を推進し、特色ある教育、特色ある学校づくりを進めた。

一方、時期を同じくして、県においては高等学校再編統合計画が推し進められ、各高等学校の特色化と活力と魅力ある学校づくりが図られる中で、本校は、「基礎的な事柄を幅広く学ぶ高校」と位置づけられた。「より高度な学問・研究や専門性の高い職業を将来の目標に据えて、基礎学力の徹底と学習の発展を目指す高校」というコンセプトに従い、平成16年度入学生からは1年次において、文系の上級学校を目指すアカデミック（文科）コースと、理系の上級学校を目指すサイエンス（理数）コースの2つのコースを導入した。

このコースの特色化と内容の充実を図るため授業時間も工夫し、1限目から5限目までは全員共通の65分授業とし、その後、生徒個々に応じた授業が組めるように、コース別及び選択者別に50分の授業が加えられる校時に設定し直した。

加えて、このコース設置の目的をより具体化させるため、基礎・基本的な事項の定着を習熟度に応じて進める「研究」を付した科目を、国語・数学・英語の3教科に各1科目ずつ設けるとともに、総合的な能力を育成し上級学校における学習への基礎力を養う「探究」を付した科目を、上記3科目に加えて理科と地歴の2教科に5科目を設け、合計11科目の学校設定科目を新設した。こうした取組は、生徒の進路実現に対応するもの



であり、今後もより一層生徒のニーズに合わせたものにしていきたい。

なお、この間本校の特色ある取組である持続的黙読（SSR）の時間も、毎週水曜日に20分間の学校裁量の時間として引き続き設け、読書を通して豊かな感性を持ち、自ら考え社会の変化に柔軟に対応できる生徒の育成にも努めている。

さらに、本年度より校長の指導のもと「グレードアップ・ストラテジー」に則った、「大学進学の実現（志をいただき、目標を持ち、果敢にチャレンジし、粘り強く、やり通す）」、「人間力の向上（学校文化が居ながらにして、豊かな心を育んでくれる）」を本校教育のねらいとし、「学びがいのある学校、教えがいのある学校」を目指して一層の改革を進めている。

## 2 成果及び課題

65分授業は、1年生の当初にのみ戸惑いがあるものの、1か月もすれば生徒は慣れ、順調に3年目を迎えてきている。幅広い教科・科目からの自由選択については、本年度の3年生が最初で、昨年度に比較して選択幅が一挙に広がり個性を生かす教育課程となってきた。また、学力の充実についてもその成果がみられ、進路実現においてもその成果が表れることを期待したい。

目的意識を持たせる進路指導については、総合的な学習の時間を「未来探求」とし、キャリアガイダンスをその中心に据えて順調に2年目を迎えている。下の写真は、昨年度のプレゼンテーションの一場面である。

本年度入学生から実施したコース選択については、合格発表後に説明会やコース分け参考テストなどを実施し、一定の判断基準を与えてから選択できるように工夫しているが、2年次にコースの変更ができるように教育課程にも幅を持たせている。

50分のコース別・選択者別の授業は、1年生のサイエンスコースと、2年生生理型で現在実施しているが、授業の終了時間の違いが認識されるまで少し時間がかかった面もある。来年度からは全学年で実施することとなり、より徹底した指導が必要であると考えられる。

学校設定科目については、大半が来年度以降に実施されることになっており、今後、検討を要することも考えられる。部活動の時間との関連や教員数・教室数等これから解決しなければならない課題も残しているが、本年度については順調に滑り出している。

最後に、このような一連の改革は全職員的一致協力して当たれる体制があって実行できたものであり、そのことに感謝申し上げるとともに、今後とも校長の指示のもと、本校教育のグレードアップを目指して自らの責務を果たしていきたいと思っている。



「未来探求」の発表風景

## 3 その他参考となる事項

奈良県立橿原高等学校ホームページ <http://www.kashihara-h.ed.jp/>

## 情報表現能力の育成を目指した商業教育の実践

### - 「課題研究発表会」の取組 -

奈良県立桜井商業高等学校 商業科

#### 1 実践内容

##### (1) 目的

本校では、教育活動の具体的な目標を明確にし、教育内容の改善も含めて、今後の本校教育の将来像づくりの資料とすることを目的として、企業が求める人材



についてのアンケート調査を行った。その結果、企業や社会が求める人材やその資質は単に知識や技能にとどまらず、礼儀・マナーや勤労意欲とともにコミュニケーション能力なども求められていることが明らかになった。

これらの結果を踏まえながら、今後、「情報表現能力」や「情報発信能力」の育成が重要であると考え、本校の商業科の指導においてもこれらの能力の育成を目指すとともに、本校の商業教育の活性化を図るため、科目「課題研究」における展開を工夫して、「課題研究発表会」の実施をその目標として取り組むことになった。

##### (2) 内容

本校では、科目「課題研究」を第3学年で2単位履修させており、9～10程度の研究主題を設定し、生徒の興味・関心、進路希望等に応じて選択させ、講座として研究を行わせている。

「課題研究発表会」は、工業科や農業科などの専門学科では従来から実施している学校も多いが、商業科においては「課題研究」の内容が資格取得を目的としたものが多いことや具体的な作品や制作物が少ないことなどから、発表会としての取組が難しく、県内の他の商業科設置校でも発表会まで実施する学校はなかった。

#### ア 各講座内容の検討

資格取得を目指す講座であっても、その活動で得られた内容や、より深く学習した内容、あるいは目的の設定から資格取得に至るまでの過程を題材とするなど、発表を前提とした取組を進めた。

#### イ 情報表現技法の共通履修講座の実施

ただ単に発表を目指すだけではなく、情報の表現や発信の技法を習得させるため、コンピュータによる「プレゼンテーションソフトの使用法」及び「ホームページ作成」の各講座を4時間ずつ各研究講座の展開に組み入れ、全員に共通履修させた。

#### ウ 発表準備

各研究が終盤を迎えた11月ごろから、各講座の中から発表のための代表グループを選出し、発表内容や方法についての準備を行わせた。中には、講座の中で独自に発表会を開催し、代表を選出した講座もあった。

## エ 研究発表大会の実施

発表会は平成16年1月21日（水）5、6限目、本校体育館において、全校生徒、教職員を集め実施した。発表は、各講座ごとに代表の生徒たちが5～10分程度で発表した。それぞれがコンピュータのプレゼンテーションソフトを利用し、工夫を凝らした内容で、すばらしい発表であった。



研究発表会の様子

## 2 成果及び課題

発表大会は当初期待していた以上の内容となり、生徒たちの「情報表現能力の育成」という目標は十分達成できたと考える。また、当初の目的以外に、次のような成果を得ることができた。

生徒たちが3年間で得た学習成果を全校生徒及び教職員全体のものとして共有することができた。

研究発表により当該生徒にとどまらず、1、2年生の生徒にも商業科に学ぶ自覚と学習意欲の高まりを感じさせられた。

今回の発表会は全校規模の取組となり、その実施には全職員の理解と協力を得る必要があった。直接、指導や運営にあたる商業科教員の共通理解を図りつつ、普通科教員の理解と協力も得られ、具体的な目標や内容、方法について、議論を深めた。実際に取り組み始めると、その過程で、先生方の創意・工夫によって、生徒たちのそれぞれの発表が個性的で、内容も充実したのものになった。そして、その結果、当初の期待以上の成果を得ることができた。ただ、資格取得を目指す講座では、発表のための共通履修講座や発表準備等が日期的に負担となったものがあった。

これらのことを踏まえ、今後、実施方法や展開について再検討していきたい。具体的には、発表技法の習熟を科目の中で行うことや、生徒に早い段階で発表を意識させ、そのための取組を工夫させたい。また、発表だけでなくインターネットのホームページを利用して情報発信していくような取組も進めていきたい。

## 3 その他参考となる事項

### (1) グループ構成員

川北 励、池田 秀幸、喜多 純、黒木 一隆、越水 高士、鈴木 勅生、高谷 伸也、谷口 達之輔、西 英樹、早瀬 昇、福山 昌之、西岡 正登、涌本 喜光、長田 卓子

### (2) 奈良県立桜井商業高等学校ホームページ <http://www.sakurai-ch.ed.jp/>

（「課題研究発表会」については上記のホームページで紹介しています。）

「教育の情報化」と「基礎・基本の学力の確実な定着」

奈良県立室生高等学校 田淵 泰央

1 実践内容

採用から約20年間、普通科の中に情報教育をどのように取り入れるかという課題に取り組んできた。前任校では、「情報基礎」「情報数理」「情報数理」等の科目を設定したり、情報に関わる類型を設置したりする中で、情報教育を推進した。また、教育の情報化にも関連する校内の事務処理(成績処理、通知票作成等)のコンピュータ化を図り、事務の効率化を進めてきた。



現任校に着任してからは、県情報教育研究会の常任委員として研究会活動に携わり、教科「情報」の新設に関わる各校の課題を解消するとともに、学校の情報化を推進するために、機器・設備を充実させ、成績処理から通知票の出力までのシステム構築を図った。また、各教員がコンピュタリテラシーを身に付け、各教科等で情報機器を利用した授業展開をサポートする職員研修等を実施してきた。さらに、自作で校内イントラネットを普及させ、ファイルやプリンターを共有させるなどして、成績処理等の事務処理の効率化を図っている。

生徒の学習活動では、当初ワープロや表計算といったコンピュタリテラシーの習得が中心であったが、その後、プログラミングの必要性を感じ、BASICやC言語等のプログラミング学習を取り入れた。最近では、コンピュタリテラシーの習得にとどまらず、コンピュータを使った表現方法等の「情報活用能力」の育成が重要となっており、コンピュータを活用した問題解決学習と高度情報化社会に対応する学習へと、目標を切り替えている。

教務部長になってからは、「生きる力の育成」と「基礎・基本の学力の確実な定着を図る」ことに主眼を置いた。そこで、まず正確に生徒の実態を把握することから始めた。それをもとに、教育課程検討委員会や学校づくり検討委員会等で審議を重ね、「目指すべき学校像」「目指すべき生徒像」を設定して全職員に提示した。また、年々多様化する生徒の進路希望や適性に応じた教育ができるように選択科目を増やし、徐々に選択幅や単位数を拡大していった。

授業形態に関しては、チームティーチングや少人数分割授業、さらに、習熟度別分割授業を積極的に取り入れ、できるだけすべての生徒に目が行き届くように努めた。

また、評価に関しては、基礎・基本の定着に向けて授業内容を見直し、それに応じた評価方法を検討した。「評価の基準と評価方法、基礎・基本の定着に向けての授業の工夫」を主題に、教育課程検討委員会で審議を重ね、そのことを受けた職員研修で、習熟度別学習や評価に関する実践発表を行い職員の意識の変革を図ろうとした。この過程で、評価方法の見直しには、評価規準の作成が不可欠であるとの結論から、教務内規・考査・授業内容等すべてを網羅した「シラバス」を作成することとなった。

「シラバス」作成は、本県では端緒に就いたばかりであるので、全国の先進校の例を参考に、本校の実態にあった原型を提示し、各教科ごとにすべての科目で作成した。



本年度は、「評価基準と評価方法」「基礎・基本の確実な定着」「来年度実施教科・科目のシラバスの作成」を教育課程検討委員会の審議事項とし、観点別評価を取り入れるなどの評価の見直しを図った。さらに、平成17年度に実施する選択科目9科目については、簡略化したものではあるが、「科目シラバス」を完成させ、今年度11月の選択科目説明会において保護者・生徒に配布した。



選択科目シラバス集

## 2 成果及び課題

校務や教科の情報化に関しては、ほぼすべての教員がコンピュータを利用できるようになり、効率がよくなった。ただ、授業への活用は、全体の50%弱であるため、今年度は、全教員がコンピュータを使った教科指導等ができるように職員研修を企画した。同時に、「インターネット利用規定」の再確認や、著作権等についても研修を深めた。また、教科「情報」以外の一般教科においても、学習内容に関する興味・関心を喚起させ、「分かる授業」を実現するための方法として、コンピュータを使った指導方法と課題を出し合い、実践に向けての研究協議を行った。今後も、こうした一般教科におけるコンピュータの利用を一層図り、研究授業などの更なる研修を計画している。



職員研修の風景

ところで、情報教育を推進する中で、生徒には、いわゆるコンピュータリテラシーの習得のみならず、情報を主体的に選択・活用できる能力や情報社会に参画する態度等の「情報活用能力」が、着実に身に付いてきていると考える。しかし、情報化社会の進展とともに「影の部分」に関する問題が指摘されているため、今後は情報に関するモラル・個人情報・著作権の保護を含めた体系的な情報教育を推進しなければならない。それが21世紀を生きる生徒に情報化社会の一員として参画する力を身に付けさせ、ひいては高度情報化社会を豊かに「生きる力」の育成につながるものと考えているからである。

「生きる力」の育成と「基礎・基本の学力の確実な定着を図る」ことを発端として作成した「シラバス」の効用のひとつは、基礎・基本の学力の確実な定着であった。小テストの実施、分割授業やT・Tによる授業が、「分かる授業」につながり、興味・関心とやる気を喚起し、家庭学習の増加という良いサイクルを生むようになることであった。これは一定の成果を上げたと考えている。しかし、更なる推進には教員の授業や考査、評価に対する意識改革が必要である。現在、教育課程検討委員会で各教科・科目の第1学期の評価方法を出し合い、評価についての情報を共有しており、さらに、第2学期の評価方法を各教科で検討している。評価については、常に説明責任が伴い、教科内での各科目ごとの評価方法は勿論のこと、それをすべての教員の共通認識とする必要がある。今後の課題として、年度初めに作成した「シラバス」をもとに、現在検討している評価基準を盛り込んだ「シラバス」をひとつの集約として完成させ、保護者や生徒にも提示していきたいと考えている。

## 3 その他参考となる事項

- ・ 社団法人著作権情報センター編 『教師のための著作権講座』
- ・ 神奈川県立総合教育センター編 『シラバスの資料』
- ・ 奈良県立室生高等学校ホームページ <http://www.pref.nara.jp/koko/murou/>



## 課題研究を通して社会に生かせる「ものづくり」についての実践

### 電脳車椅子「WANDER」の製作から

奈良県立王寺工業高等学校 久保田 憲司

#### 1 実践内容

本校では、障害者と共生できる社会を目指す基礎となる感性を育むことを目的に、養護学校との学校間交流を盛んに行っている。以前より「心のふれあい」を通して交流活動を行う中から、工業高校生として「工業技術によるふれあい」ができないものかと考えていた。そんな折、3年生の「課題研究」で物まねロボットの移動方法（車椅子型の台車）について話しあっている中で、生徒から「ロボットが乗るのではなく、障害のある人が乗れるかっこいい車椅子を作りたい」との発案があった。そこで、「課題研究」の研究テーマを変更し、「障害者用電動車椅子の研究」に取り組むことにした。



まず、現在普及している車椅子について、養護学校での利用者や介護等をしておられる方から問題点、改良すべき点、等の要望事項を資料として集めるとともに、生徒たちに「未来の車椅子とは」をテーマにアイデアを出させた。また、項目別に「安全性」「使いやすさ」「デザイン」「ネーミング」「装備品」について考えた結果、多くの制作課題を得ることができた。これにより、「これ以上の機能を備えた電動車椅子は世界中どこを探してもない」という車椅子の基本構想ができた。日本の歩道は車道に向かって傾斜が多く、転倒への不安が多いことから、車椅子自体が、この際に全く傾くことなく、常に水平な姿勢で走行できることを第一の条件とした。折しも、特許庁の産業財産権研究協力校指定研究を受けていたため、特許に関する学習も取り入れながら、設計と制作に取り組んだ。またデザインについても、今までの車椅子は、全く個性がなく、カッコ良さに欠けるとの意見から、生徒たちが、今までにないデザインを考案した。その結果、F1レーサーの背もたれや、スポーツカーのフェンダーの形状を取り入れた斬新なデザインのボディが完成した。ネーミングも、ものづくりの大切な要素のひとつとして重要視し、「歩き回る」という意味から、「WANDER」と名付けた。課題研究班のメンバーは野球部や柔道部、吹奏楽部、情報処理部に所属しており、ものづくりの分野ではまだまだ素人の生徒たちばかりであった。したがって、基本設計はできあがったものの、いざ製作段階になると、あまり自信がない様子で、「本当にできるかな？」といった不安を見せていた。

生徒たちは、11月に開催される奈良県産業フェアへの出品を目標に製作に取り組んでいった。ところが、「課題研究」は週2時間でしかなく、全く時間が足りない。そこで毎日の部活動終了後、少しずつ作業をすることにし、夏休みもほぼ毎日活動した。製作が進むにつれ生徒たちの意欲はさらに強くなり、全く休むことなく製作に取り組んだ。



電脳車椅子WANDER

時間不足にあっても、「美しく、きっちり丁寧に作る」を基本理念として、何度も修正

を重ねながら作業に取り組んだ。そうするうちに、機械の使い方、工具の使い方にも慣れ、見違えるほど上手に作るようになった。彼らは卒業後、ものづくりのプロとして活躍することを目指しているが、そのためにも、ものづくりの楽しさだけでなく厳しさも感じさせたいという私の願いを知っているかのように、懸命に製作に取り組み、次々と難問を解決していった。

これらの努力により、若い柔軟性のある頭脳を生かしたアイデアあふれる作品として「電動車椅子」が完成し、社会への貢献の第一歩となったように感じる。これからも、多くの方々の協力を得ながら、さらに工業高校生の力量が発揮できる作品づくりと社会に貢献できる素晴らしいものづくりができる生徒の育成を実践していきたい。

## 2 成果および 課題

生徒たちは、「美しく、きっちり丁寧に物を作る」を基本理念に、ものづくりに励んだ。その結果として、計画・準備・製作・運転等、一連の工程から計画通りの電動車椅子が完成し、自分たちのやってきたことへ誇りと、ものづくりに対する自信を深めてくれたように思う。できあがった作品は、当初よりコンテストへの出品を常に意識して製作してきた甲斐があり、全国工業高等学校校長協会主催の第1回「技術・アイデアコンテスト」(全国で65件の出品)で優勝することができた。また、奈良県産業フェアや養護学校でのデモンストレーションも好評であり、ある養護学校では車椅子に関する改造等のアイデアを考えるプロジェクトチームが作られた。そこで出てきたアイデアを本校生徒の作品づくりに生かし、乗り手の立場に立った、よりよい車椅子の研究を、今後も目指していきたい。

「電動車椅子」の製作を機に工業高校の特性を生かした交流が、できるようになった。県外の養護学校からもデモンストレーションの要望があり、このことをニュースで聴かれた障害のある老人からは、歩行器の改良をお願いしたいとの依頼が舞い込み、工業高校の技術に対する多くの期待が寄せられるようになってきている。

今回の電動車椅子には特許出願等まだまだ実用化には課題が多いが、これらの課題を解決しながら福祉関係を中心に、社会に貢献できるものづくりに取り組みたいと考えている。



奈良県産業フェア

## 3 その他参考となる事項

平成16年11月6日 「第2回ジャパン・サイエンス&エンジニアリング・チャレンジ (JSEC2004)」で発表したテーマ「道路事情を克服し、快適かつ安全に走行できる電動車椅子の研究 - 段差を上りやすくするタイヤホイールの開発 - 」は文部科学大臣賞を受賞、2005年5月アメリカアリゾナ州で開かれる『国際学生科学フェア「Intel ISEF」』に日本代表として参加する。このフェアは世界40カ国から約1000プロジェクトが発表される。全て英語でのプレゼンテーションとなり参加メンバー3名は毎日英会話の練習に励んでいる。

奈良県立王寺工業高等学校ホームページ <http://www.oji-ths.ed.jp>

## 二輪車の乗車マナー習得のための学校・地域・家庭の在り方について

奈良県立大淀高等学校 交通安全教育研究実践グループ

### 1 実践内容

平成14・15年度に交通安全教育実践地域事業の研究指定を受ける中、効果的な交通安全への取組について検討し実施した。折しも、生徒数減少に伴う教員数の減少で校務分掌の再検討を校内でも行っており、「生徒が取り組みやすく効果が期待できること」を中心に考え、また、地域との連携では、家庭や地域の組織や団体などと協力ができる体制の整備に尽力した。今日、子どもを取り巻く環境は激しく変化し、事件・事故や災害はいつでも、どこでも、誰にでも起こり得る時代と言えるが、学校の取組だけでは教育活動にも限界があるので、学校・地域・家庭の連携を図ることで、交通安全についての意識がさらに高まるのではないかと考え、実践研究を進めている。



ところで、本校生徒のうち、単車免許取得者は45%で、単車通学者は15%程度である。この単車通学生を、交通安全推進のリーダーと位置づけ、安全運転技術の習得や、危険予知等の知識を身に付けさせるとともに、他の生徒も含めた、交通安全の意識高揚を図ることを考えた。具体的には、単車通学者を対象に、単車実技講習会や救命講習会を実施し、全校生徒対象には、危険予知を目標とした交通安全ホームルーム、交通安全標語作成、春・秋の交通安全県民運動に啓発物を作成し、代表生徒が参加するなどの活動を行った。

単車実技講習会では、吉野自動車学校において県警白バイ隊・中吉野警察・自動車学校教官の方々から安全講習や実技指導を受けた。車の死角の講習では、実際に大型車の運転席に座るなどし、自分たちが普段乗車する原付の見え方に驚いている様子であった。また、色彩による遠近感、見え方の違いなど、多くの講習や指導を受けた結果として、生徒たちの安全意識や運転技術が大きく向上した。



単車実技講習会

救命講習会は、消防救急活動への理解や地域との交流を図るため、中吉野

消防署において実施した。心肺蘇生法の講習を救命救急士より受け、救命基礎講習の修了証を受けた。救急隊員からは、交通事故時に出動した時の体験などを含め、交通安全に関する講話をいただき、実り多い研修になった。



また、交通安全ホームルームを1月に実施した。危険予知の知識を高めるねらいのもと、職員研修を実施した後、3学年それぞれに課題を設けて、多角的な視点から交通状況を把握し、的確な判断のもとに適切に対処して事故を未然に防ぐことや、そのためにも心を安定させ、交通法規をはじめとするさまざまなルールを守ることの大切さを学ばせたが、生徒たちの取組は真剣そのものであった。

交通安全ホームルームに関連しては、交通安全標語を全校生徒が作成し、生徒会交通安全委員会が優秀作品を選考し表彰を行った。ホームルームの内容を受け、危険予知に関する標語も多く出された。優秀作品は春の交通安全県民運動時の啓発用ティッシュに掲載するなどして各種啓発に活用した。春・秋の交通安全県民運動では、上記のティッシュや、家庭クラブ作成のマスコットや小物入れなどを、生徒会や育友会、地域の交通安全対策協議会の方々と一緒に配布している。



交通安全啓発活動

## 2 成果及び課題

単車実技講習会、救命講習会や交通安全啓発活動を、地域の関係機関・団体との連携・協力を図りながら実施したことは、地域社会から高い評価を得ており、参加生徒は、地域社会の中からさまざまな事柄を吸収し、学校内での交通安全に対するリーダー的意識も芽生えてきた。このため、単車通学生徒の事故の減少や、生徒の交通違反者が自己申告をするなど、交通規範意識の高まりへとつながってきたことは、大変喜ばしいことである。また、各種講習会や交通安全ホームルーム等、一連の具体的な活動に関しては、さらなる効果を期待すべく工夫を重ねながら、これからも継続して実施できる体制を維持したいと考えている。

生命尊重、命の教育が叫ばれている中で、今後も2年間の実践成果をもとに、交通安全教育を通じて社会の一員として、責任をもって行動することができる、健全な社会人を育成していきたい。また、家庭および地域の関係機関・団体と協力をし、自分の命だけでなく他人の命も守る大切さを教え、実践できる交通安全教育を進めていきたい。

## 3 その他参考となる事項

- (1) ホームルーム指導案の作成にあたっては、次の資料等を参考とした。

財団法人日本交通安全教育普及協会編『みんなで実践 交通安全(高校生用)』(平成15年)

財団法人日本交通安全教育普及協会編『交通安全教育の新たな展開』(平成12年)

- (2) 財団法人日本交通安全教育普及協会ホームページ <http://www.jatras.or.jp/>

奈良県立大淀高等学校ホームページ <http://www.oyodo-h.ed.jp/>

- (3) グループ構成員 松田勝雅、田名後健太郎、嶋田和弘

## L.S.Q. (ライフ・スタイル・クエスト) の立ち上げと効果的な運営

奈良県立郡山高等学校 西川 裕弘

### 1 実践内容

- (1) 第1段階(平成13年度まで)教務部を中心に原案づくりの段階  
教務部会で、「育てたい生徒像」と「総合的な学習の時間の果たす役割」について検討を行う。「総合的な学習の時間」の趣旨やねらいを中心に、活動内容や形態を検討する。関係委員会(教育構想検討委員会・教育課程委員会等)との連絡調整を行い、総合学習係を中心に、「進路学習型」と「教科横断型」の2案を作成する。



校内研修会等を実施して全職員の共通理解に努める。研修会で「L.S.Q」の目指すべき姿と概要づくりのためのアンケートを実施する。アンケート項目は、生徒の現状と課題や育てたい生徒像、今までの教科指導で「L.S.Q」の手掛かりとなるもの、「L.S.Q」の時間に導入したい内容等であった。アンケート結果は職員会議等で検討し、実施内容に関する教師間の共通理解を図った。さらに、全校体制での取組を確認し、基本方針と概要づくり(教科横断型:1年次は基礎講義、2年次はグループ研究、3年次は個人研究)を行う。一連の討議を踏まえ、教務部総合学習係が中心となり、テーマと活動概要を策定し、職員会議での検討を経て決定し、全職員の担当を五領域(環境、福祉、国際理解、日本文化、生命)に分けた。また、総合学習準備委員会の設置を年度末に行い、平成14年度より本格審議に入る準備段階とする。

- (2) 第2段階(平成14年度)総合学習準備委員会を設置、実施までの準備を行う段階  
委員会の構成委員は、教頭、事務長、教務部長、進路指導部長、教務総合学習係、進路総合学習係、各領域チーフ(計11名)とする。

委員会における審議事項は中学・高校(先進校)における実施状況の調査、年間指導計画の策定、指導案の作成(本年度中に作成)、評価・単位認定方法の決定(必修修であるが、必修得としない。自己評価・相互評価表の作成等)、L.S.Q専用ロッカーの設置、校外における体験・研修の実施のガイドラインの策定、発表会の運営方法等である。多岐に及ぶ事項について、各担当委員を中心に全体の方針と具体的施策を決定した。決定事項は校内LANでデータベース化し教員がいつでも利用できるようにする。

「L.S.Q」は全教員の協力があって、その効果を発揮できる。一部の教員や委員会がどんなに頑張っても、実りある「L.S.Q」にはならない。各分掌や委員会が相互に連携できる体制を確立し、教職員一人ひとりの意見が反映されることが重要である。ただし、目標・ねらいに向かって推進するためには、全教員の総意として決定することと、委員会として推進すべき事柄を分離する必要がある。

- (3) 第3段階(平成15年度から)L.S.Q推進委員会を設置し、本格実施の段階

委員会をL.S.Q推進委員会に改編、原則、前年度の委員が継続する。本格実施を迎え、領域毎に木曜日の研修会(前回の反省と次回の研修、1学期前半まで)を実



施する。各学期末に実施状況の点検と問題点の確認を行う。2年次以降の具体的な年間指導計画の再確認と決定、実施校時の検討（1年次：水曜4限から火曜5限へ変更、2年次：木曜5限の設定）、また、2年次のグループ研究について、生徒の希望研究テーマを調査決定し、担当の教師集団の人数調整を行う。グループ研究時に予想される問題点の把握と対応策の検討（評価方法、利用特別教室の調整、毎時間毎の計画・評価表の作成等）、指導計画案の再検討を行う。

## 2 成果及び課題

推進委員会を中心に、教員や生徒へアンケート調査を行い、取組の成果や課題の点検を行い、領域毎の次年度の実施内容や方法について再検討を行う。

担当者より、「分野により生徒の学習意欲が高く、予定より内容を深化させた。」「内容の易化を行った。」など、様々な報告があり、生徒の実態にあわせた柔軟な対応の必要性を感じる。当初より、一定の目標が設定されているのではなく、何にどう取り組むかなど柔軟に対応しなければならない。また、「教材の追加購入により、展開しやすくなった。」「他教科と異なり点数化されないため、取組が不十分な場合もある。」などの意見もあった。

生徒用アンケートからは、「一般教科にはない様々なテーマについて学ぶことができ、理解が深まる。」「実習や討論など通常の授業にはないものがあり、より深く学ぶことができる。」「ビデオ視聴や実験実習等、実際の体験を通して学習することが多いので理解が深まる。」「自分たちで計画を立てるのでやる気が出る」などのプラス評価がでた反面、「関心のない分野も学習しなければならない。」「毎回テーマが変わるので中途半端に感じる。」「教材などが少なく理解しにくい。」等課題の確認とともに、次年度の指導案の再点検・再構築が必要な分野も明確になった。

「LSQ」が実際に展開されると、学年共通テーマ以外は各担当者ごとに「LSQ」が展開されることになる。「どこで何が行われているかわからない」といった状況にもなりかねない。そこで、委員会として展開状況を把握し、問題点へのより速やかな対応ができるように検討を加えた。また、教員にとっては「LSQ」の負担感は非常に大きいですが、成否は、教員がいかに主体的に取り組むかであり、教師がこの意義を十分に理解し、正面から取り組んだとき、「LSQ」だけでなくあらゆる教育活動の場面に好影響を及ぼす。そして、教師間の協力体制が確立し、「LSQ」が一定の成果を収めたとき、新たな特色ある学校に、教師自身も生徒も変わると考えられる。

## 3 その他参考となる事項

- (1) 奈良県教育委員会編 『「総合的な学習の時間」の指導事例集』（平成13年）
- (2) 文部省 『特色ある教育活動の展開のための実践事例集「総合的な学習の時間」』（平成12年）
- (3) 宮崎猛編著 『高等学校「総合的な学習」授業プランと実践』（小学館 2002年）
- (4) 奈良県立郡山高等学校ホームページ <http://www.koriyama-hs.ed.jp/>

## 奈良県情報教育の普及について

奈良県立山辺高等学校 服部 秀一

### 1 実践内容

#### (1) 情報教育研究会

昭和59年から県立志貴高等学校の教諭として、特色ある学校づくりのため、BASIC 言語を中心に情報処理に関する授業を行ってきた。当時は教科「情報」もなく、学校独自の教材を開発し授業に取り組んでいたが、普通科高校で「情報」を行っている学校は少なく、相談できる教員も少なかった。そこで、教員が互いに協力し、その方向性や普及について考えていくため、志貴高等学校が中心となって、昭和61年11月に「奈良県情報処理教育研究会」を発足させた。



私は常任委員長として、まず最初に、教職員の情報処理に関する研修を行った。また、工業の検定内容を取り入れた検定試験を実施し、生徒の情報に関する意欲を持たせる活動も行ってきた。発足当時、情報処理の普及のため、各校から様々な教科の教員が参加して、情報処理教育研究会を運営してきたが、その後「情報処理」から「情報リテラシー」など広い意味を持つ「奈良県情報教育研究会」へと名称を変更した。

常任委員長を11年間務めた後、県立教育研究所に転勤し、教育情報部において情報教育に関する講座を担当した。さらに、平成11年度からは県立山辺高等学校に勤務しており、昨年度から教科「情報」の授業が始まった。現在は、教科「情報」において、「情報A」「情報と表現」「コンピュータ活用」等の授業を担当している。そして、昨年度から再び、「奈良県情報教育研究会」常任委員長として研究会の活動を行うこととなった。会員もこれまでとは異なり、情報科の教員に他教科の教員が加わった組織となった。

また、毎年、情報教育の現状を学ぶための見学会を行っており、本年度は大阪信愛女学院高等学校において、高等学校での情報科「情報C」の授業の見学、小学校の情報教育などの見学会を実施した。大阪の私学では、情報教育への取組が熱心で、教科「情報」の公開授業を数多く実施し、意見交流を活発に行っていた。

現在、研究会では、予定表やデータの書庫、掲示板として利用できるように設計されたグループウェアを立ち上げている。インターネットに接続してWebページのアドレス<http://grace.ceser.hyogo-u.ac.jp/geta2/>を入力し会員に発行したユーザー名、パスワードを入力すると、右のようなページが開き、情報教育研究会会員だけの情報交換ができる場所となっている。



#### (2) 図書館業務ソフトの開発

高等学校図書研究会からの依頼で図書館業務についてのソフトを開発した。データベースソフトを使って、司書の立場に立って作成したもので、一般的な汎用の図書管理ソフトではなく、学校図書館の運営に即したものである。マウス操作主体で、簡単に扱えるものであり、図書の貸出返却はバーコードで行える。また、貸出状況、貸出集計、蔵書点検等、カウンター業務から管理業務までに活用できるようになっている。右は管理者用の初期メニューの画面である。別に閲覧室で生徒が検索だけをする事ができる画面もあり、セキュリティーに関しても考慮されたものになっている。



## 2 成果及び課題

### (1) 情報教育研究会

昨年度から始まった教科「情報」では、各学校によって環境の違いがあることと、教科書にも使いにくい部分が多いため、各学校で試行錯誤しながら独自の授業を行っている現状がある。これまで、情報教育研究会会誌を18号まで発行し情報教育に関する内容を発信してきたが、今後も教科「情報」の情報交換の場として、情報教育の発展に努力していきたい。そのためには現在開設しているグループウェアだけでなく、会員のメーリングリストも作成していく予定である。

### (2) 図書館業務ソフトの開発

高等学校図書研究会では、このソフトのマニュアルを配布し、研修を繰り返し行っているため、現在、奈良県下の高等学校では19校がこのソフトの使用または使用を希望している。今後は、インターネットで各校の図書データを公開したり、他校の図書を検索できるようにし、各校の図書が共有の財産となるシステムの開発を行いたい。

## 3 その他参考となる事項 <これまでの発表や研究内容>

- |       |   |
|-------|---|
| 昭和60年 | 全国数学教育会奈良大会で「マイコンを使った実習授業について」発表                  |
| 平成元年  | 第38回近畿放送教育研究大会で「情報処理に関する授業」発表                     |
| 平成3年  | 第32回 近畿学校図書研究大会で「学校図書館とコンピュータ」発表                  |
| 平成5年  | 指定研究「数学科におけるコンピュータの活用と教材開発」(研究集録創刊号)              |
| 平成8年  | コンピュータを活用した学習指導の工夫「指導資料」の作成委員                     |
| 平成9年  | 学校図書館管理システムの開発 -ネットワーク化を目指した図書館管理システム- (研究紀要 第5号) |
| 平成10年 | 保健室管理システムの開発 (研究紀要 第6号)                           |
| 平成11年 | 学校におけるネットワーク管理 (研究紀要 第7号)                         |
- 奈良県立山辺高等学校ホームページ <http://www.yamabe-hs.ed.jp>

夢に向かって努力する生徒の育成  
- バスケットボール部の指導で -

奈良県立片桐高等学校 安田 弘子

1 実践内容

私が片桐高校に赴任した当時、本校のバスケットボール部は、ほとんど活動していない状況にあった。前任校で県大会に優勝し、全国大会出場を果たした翌年に転勤してきたのだが、前任校と比較してはいけないと思いつつも、その活動状況は、自分の理想とは程遠かった。しかし、一途にうまくなりたいと願う生徒たちと共に、日々の指導を積み重ねた結果、次第にクラブ活動としての形が整いはじめ、転任5年目にして、ようやく男子が近畿大会に初出場、6年目に県大会で初優勝することができた。何もないところからチームを作るには大きなエネルギーが必要である。でも、それが実現できたのは、私一人の力ではなく、熱心についてきてくれる生徒がいたからであり、また、数多くの先生方のアドバイスや支え、保護者のご協力によるものであると感謝している。



現在、部員は男女を合わせると60名になる。部活動離れが多い中で部員数が増えているのは、全国大会出場の夢を果たすべく努力を続ける部員たちにとって、何よりの激励であると受け止めている。大きな実績のない選手たちであっても、夢に向かって努力を続ければ必ず実現することを、私自身のみならず、生徒たちも感じ、大切にしている。残念ながら、本校ではこれまで、団体種目で優勝したチームがなかった。バスケットボール部も、運動能力の高い生徒を特に集めたりせず、入学してきた生徒を大切に育て、勉強と部活動との両立を目指している。しかし、このことは決して容易ではなく、私自身も、途中で何度もくじけそうになった。そんな時に、生徒の笑顔や頑張り、純粹さに励まされて、コートに立ち続けることができた。なかなか結果が出ないことで、勝ち負けだけに一喜一憂する自分の愚かさに気付かせてもらったのも、生徒の素直な気持ちや反応のおかげであった。生徒たちの「うまくなりたい」という気持ちと、「できるのかなあ」と思う私の心との対峙の日々が続いた。運動能力があまり高くなかったり、すぐに気持ちが切れてしまったりしがちな生徒に、勝利を手にするために必要な、技術や体力や精神力の大切さを納得させ、一つ一つ獲得させていくことは難しいことである。しかも、手本となる部員が校内にほとんどいない中で自らの道を切り拓いていく生徒には、練習が辛いだけで終わってしまうのではないかという不安も出てくる。先輩の成功例がたくさんあれば理解しやすいが、何もない道を自分達だけで頑張り通す生徒には頭が下がる思いである。熱心についてきてくれる生徒に感謝したい。

これまで、実践してきたことを挙げてみると、朝練習の習慣のない生徒たちに、練習後に、手作りのおにぎりを食べさせて朝練習を定着させたこと。生徒達に経験を積ませるために私的な大会を作り、県内の強豪チームの協力も得ながら、県外から強豪チームを呼び、全敗であっても強いチームと対戦し、真似をすることから選手としてのマナーや体力の必要性を、生徒に肌で感じさせたこと。コーチ向けの指導者講習会や生

徒向けのクリニックなどを中学生や他校生を対象として行い、生徒がバスケットボール技術を段階的に理解することに役立てたこと。講習会の見本役をたくさんの指導者や生徒の前で胸を張って行わせたことにより、今までと違った自信のようなものを生徒に芽生えさせてきたこと。テスト前に勉強会を開き、学習においては苦手な生徒が数多くいる中で、他教科・副顧問の先生方の協力を得て、欠点保持者をほとんどなくさせたこと。練習前の清掃活動や練習ノートの記録をさせたことなど、何一つとして奇抜なものはなく、地道な取組をただ辛抱強く続けてきただけである。ただ、そのようにして、生徒がやらなければならないことをきちんとできるように指導し、人間的なバランスが取れてこそ、初めて自分達の目指す目標を達成できることを、毎日のように確認しあっている。

私自身も、校務分掌では保健体育部の部長を3年間務め、今は、担任として、また保健体育部の副部長として校務に携わっている。そして、自分自身も、まだまだ教員として納得のいく指導方法を模索している現状である。

先日の練習終了後に次のような話をした。「アメリカの有名なコーチが、『まず家族を大切にし、そして学業を頑張ってから、バスケットボールがある。』と言っている。みんなは家族を大切に思い、前向きに苦手なことを克服し、バスケットボールに挑んでいるだろうか。また、他のコーチは『良い指導者の前に良い先生でなければならない。』とも言っている。私も家族や仕事を大切にしないと、バスケットボールの指導はできないと思っている。だから、何にでも手を抜かず一生懸命努力する。クラスの生徒たちにも、心をこめて話をしようと思っている。ぶきっちょで要領が悪く、失敗や後悔ばかりしている私であり、練習を見る時間も少ないけれど、これしか私にはできない。本当の成果はコートを離れたときに得られるものであり、20年後、30年後にこれだと感じる時がやってくる。目の前の3年間は短くて、気がついた時には終わっているかも知れない。ほんの小さな3年間ではあるが、今しか出会うことのできない3年間であり、仲間と過ごす輝いた3年間でもある。一日一日を大切に、本当の意味での勝ち組になれるようがんばろうな。」このような話をし、その日の練習を終えた。

部員が少なくても、練習を見られない日が多くても、目の前に生徒がいる限り、今も7年前も気持ちは同じである。情熱を生徒と共に燃やし続けられることは、教師として、また、少し前を歩く人生の先輩として楽しいことである。いつも生徒を身近に感じ、生徒の目の高さで共に成長していく素晴らしさを味わえる教師であり続けられることに感謝しつつ、いつか夢のかなう日を楽しみにしながら努力を続けていきたい。

## 2 成果及び課題

平成16年度第35回全国高等学校バスケットボール選抜優勝大会に初出場し、初戦を勝利で飾ることができた。平素の生活と部活動をうまく関連させ、全国に通用する競技力と豊かな人間性を身に付けた高校生の育成のために頑張りたい。

## 3 その他参考となる事柄

奈良県立片桐高等学校ホームページ <http://www.katagiri-shs.ed.jp/>



生徒の成長について  
- 部活動への取組を通じて -

奈良県立田原本農業高等学校 加藤 義明

1 実践内容

(1) 平城高校

創立時に赴任した。吹奏楽部とともにヴァイオリンやチェロなどの弦楽器編成による室内楽部も創設した。吹奏楽13名室内楽5名で合計18名である。ほとんどが初心者という状態だったので、どの楽器も一から教えなければならない。最初は苦労したが、そのうち軌道に乗り始める。2年目の12月に無理を承知で初めてのコンサートを開催した。観客も百人程度と少なかったが、これをきっかけに急成長することになる。



翌年3学年そろった時に、部員の希望によりコンクールに初出場し、2位に入賞した。この頃より、部員たちの目の色が変わり、「次は優勝だ。」と意識が変化し始めた。だが、ある意味では、このときから私のコンクール嫌いが始まったのかも知れない。そして、3年生(1期生)が、「引退したくない。」と泣きながら部活動から巣立っていく姿を見た時、もう一度この子らをステージに立たせてやりたいと思い、それぞれの進路を決めてから戻って来られる場を設けた。それが、この年から3月末に行うこととなった、スプリングコンサートの始まりである。そのうち部員数も増加し、年2回のコンサートが可能になったので、夏もコンクールからコンサートに切り替えた。それも、他校ではやっていない音楽劇に取り組んだ。題材は「窓際のトットちゃん」で、1年目は演劇部とともに上演したが、2年目からは吹奏楽部員単独で実施する。これは、障害のある方をはじめ、多くの方々に好評を博した。9年間勤務したが、最初、18名だった部員が、気がつくやうに100名になっていた。

(2) 西の京高校

赴任した年の夏、前任校の平城高校とジョイントコンサートを開催した。生徒たちは、技術や音楽的レベルの差・セッティングや楽器を出し入れする時の動きの違い・部活動に対する意識の差などにとまどいをもちながらも、一方で学ぶことも多かったようである。その後、いろいろな面で部員は成長した。年度末には、初めての単独コンサートを開催し、2年目の夏にはコンクールではなく音楽劇「窓際のトットちゃん」に挑戦した。3年目からの夏のコンサートでは、部員による脚本をもとにした音楽劇に取り組み始める。常に人権問題を根底に据え、「障害者問題」や「在日韓国朝鮮人問題」や「戦争」などをテーマとして扱った。こういった音楽劇は生徒会や解放研の賛同も得て、ともに人権問題について考え、討論しながら進めていった。また、「たんぼぼの家」や「七条養護学校」との交流を通して、障害のある方々と実際に時と場をとともにすることにより、部員の意識が高まっていき、解放研のピラ配りにも自主的に参加するようになった。また、阪神淡路大震災の折には、私が参加した神戸でのボランティア活動に同行する生徒も少なくなかった。

(3) 生駒高校

赴任した時、音楽的レベルはもちろんのこと、部の運営その他で未熟な部分が多か

った。なんとか立て直さなければならないという強い気持ちで強く引っ張っていくと、指導に部員が必死に食らいつき、短期間に予想以上の成長が見られた。ただ、それまでと違い、部員数の少ない学校だったので、年2回のコンサートの開催は困難であった。そこで、夏にはコンクールで良い演奏をすることに主眼を置き練習に取り組んだ。4年間しか在任しなかったが、コンクールでは2回県代表として「関西」に行かせてもらった。また、初年度の3月に前任校の西の京とジョイントコンサートを開き、翌年からは単独のコンサートが開催できるようになった。

#### (4) 田原本農業高校

当初は人数も少なく、ほとんど活動ができていないクラブだった。それだけに、この生徒たちに、自信をもって卒業させてやりたいという思いがあふれてきて、それが新たな自分の目標となった。そのためには、まず「一生懸命打ち込むこと」「頑張ること」を体感させ、それによる達成感を味わわせてあげることが大切だと思った。そこで2年目に、自分たちのコンサートを開くという目標をもたせ、その他にもいろいろなことを短期間で経験させた。今まで指導した学校の生徒より、技術的には下回る部分が多いのに、はるかに多くの行事に参加させた。不思議なことに私にも変化があった。あれほどコンクール嫌いで「賞」というものに違和感をもっていた私が、いつしかこの子らに自信をつけさせるためには、はっきりと結果の出るコンクールで「金賞をとらせてやりたい。」と思うようになっていた。

## 2 成果及び課題

### (1) 成果

どの学校でも3年間の部活動の中で生徒は成長したが、現任校である田原本農業高校の生徒たちは成長の度合いが最も高かった。最初は、わがままや自分勝手な部分も多かった生徒たちが、全体のことを考え、人のことを気遣えるようになったことは、何よりの成長と言える。そんなことなど気にも留めてなかった生徒が、汚れている所をみつけては教室・廊下・トイレや校庭の掃除を自主的にするようになり、人の嫌がることでも文句一つ言わずに動く。そして何よりも自分に自信をもてるようになった。そして、4年目の昨年のコンクールでは、初めて金賞を受賞することができた。コンクールで涙したのも金賞をとって心底嬉しく思ったのも、私としては初めてであった。輝かしい成果を残した今年の卒業生は、自分の胸に自信を刻んで卒業していったが、この生徒たちの成長の陰には、親身になって協力してくれた平城・西の京・生駒の卒業生の存在は不可欠であった。私にとって最大の喜びは、私が勤めた4校の年代も異なる生徒がまるで同じ一つの学校を卒業したかのように、一つのバンドを組んで仲良く人間付き合いしていることである。

### (2) 課題

高等学校再編計画の中で、田原本農業高校にも新しい学校が生まれるが、今後部員数の減少が危惧される中、少人数であっても何とか活動を継続させていきたいと考えている。

## 3 その他参考となる事項

奈良県立田原本農業高等学校ホームページ <http://www.tawaramoto-ah.ed.jp/>

## 部活動を通した「生きる力」を育む取組について

奈良県立桜井高等学校 堀内 秀規

### 1 実践内容

バスケットボールの指導を始めて今年度で27年目になる。これまで、青春期にバスケットボールを通して学び培ったことが、精神的基盤になり、確かな「生きる力」を身に付けて社会に貢献し、活躍できる人材の育成を願って、日々指導を重ねてきた。

バスケットボールは集団競技であり、個人の技量の向上は言うまでもなく、集団の中でいかに協力し、その組織力（チーム力）を向上させていくかが求められる。それは、生徒が高等学校を巣立ち、社会に出たときに、個人の力量を高めつつ、組織の中で貢献することの重要性と同等のものであると思う。どのスポーツも心・技・体の充実が重要なことは言うまでもなく、バスケットボールを通した指導が、社会で通用する人材育成の場であるとも考えている。

「生きる力」とは主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質・能力、自律と連帯に支えられた豊かな人間性、そしてたくましく生きる健康と体力であると言われている。私の実践するバスケットボールの指導を通して、知・徳・体のバランスのとれた発達を目指す指導は、「生きる力」の育成につながると確信するものである。

具体的な取組としては、日々の実技指導は言うまでもなく、指導の折々（ミーティング等）に、自らの課題を解決するためのアドバイス、学校・学級・クラブ等での協調するために必要な感謝や奉仕の意識の醸成、また常に向上心を高く持ち、目的達成への惜しみない努力の重要性等を話すことが多い。

また、毎年、卒業文集として、『420㎡の青春』（420㎡とはバスケットボールのコートが縦28m、横15mの大きさであることから命名）というタイトルの文集を発行し、卒業時に配布している。この文集は、3年生一人ひとりが3年間の想いを綴ったものであり、生徒の原稿を私がタイピングし、その年度の卒業生の記録や後輩からのメッセージ、新聞記事等で構成された約80～90ページ（B5判）の手作り文集にまとめあげる。前任校（県立登美ヶ丘高等学校）時代から作成を始めた冊子は計15冊、1,000ページ近くになった。バスケットボール部に所属した3年間で、いかに葛藤し、挫折し、また喜びを分かち合い、助け合い、涙した日々の様子、そしてバスケットボールを通して生徒自身が成長したかが綴られており、毎年、12月から2月にかけて、彼らの原稿をタイピングし、編集する作業が、私自身にとって、卒業生との3年間の思い出し、彼らの成長を実感する大切な時間となっている。

さらに、長期休業中には、学校からの課題以外に、クラブ独自に読書感想文や時節にあった新聞記事の感想等（今年度の夏期休業中課題はアテネオリンピックの話題）の提出を求めるとともに、その内容を発表させる時間を設けて、自ら考え、考えたことをうまく整理し、多くの人たちに伝える力の育成にも努めている。

現在、奈良県高等学校体育連盟バスケットボール専門部の専門委員長をしている関係で、大会役員として近畿・全国大会へ赴く機会が多い。その場で活躍する高校生を見る



たびに、自分の指導する生徒たちを是非大きな舞台で活躍させたいという気持ちは一層ふくらみ、自らの夢であるその想いを、語り続けている。

## 2 成果及び課題

『420㎡の青春』から、3年間の生徒の成長を実感する。その文集の中に生徒自身が3年間の想いや成長を書くまでには、当然のことながら、生徒とのぶつかりや苦悩、苦い体験が多々ある。『教育とは理想と現実、希望と制約、長所と短所が激しくぶつかりあう戦場である』と言われるように、その“戦場”で生徒と夢を語り合い、成就感や協調性、問題解決能力等、そして真の「生きる力」を体得させたく思っている。事実、学校生活（学校行事、学業等）において活躍する部員も多く、クラブ活動を離れた彼らの活躍は、私自身の喜びとなっている。また、教え子の同窓会や結婚式で、高校時代の部活動の話題になると、この文集の話になることが多い。高校時代の宝物として大切に保管してくれている卒業生、部活動で培った精神的基盤があるから今の仕事が続けられていると熱く語ってくれる卒業生。卒業後も彼らの心にバスケットボールを通した指導が生き続けていることに感謝している。

校務等で生徒と共有する時間が減少しつつあるが、その指導時間の減少を、生徒たち自身が、練習課題、チーム目標等を正しく見極め、これまで育成に努めてきた自ら考える力をフルに発揮することで、補ってくれると信じている。

## 3 その他参考となる事項

昭和62年4月に県立登美ヶ丘高等学校が開校し、初年度から勤務した。初代校長の亀井敦育先生（故人）が全職員に、「初年度からの取組を記録として残してください。」と言われた一言が、『420㎡の青春』の文集を作成するきっかけとなり、現在まで続けることができた。故人のご冥福をお祈りするとともに、あのと時の一言に深く感謝申し上げたい。

（写真右：平成16年3月1日発行 表紙）

文科省 高等学校学習指導要領（平成11年）

ラビ・トケイヤー著 『ラビ・トケイヤーの校長日記』

（平成8年 徳間書店）

奈良県立桜井高等学校ホームページ <http://www.sakurai-hs.ed.jp/>

